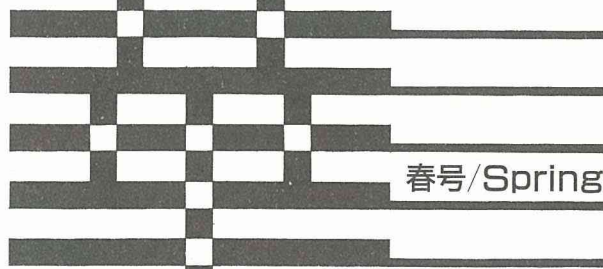


論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 4
発行日 / Pub. date	1992, 5
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



Ka No.4 1992  
 design journal of  
 the department of architecture  
 and building engineering  
 Tokyo Institute of Technology  
 published by TIT society  
 of architectural  
 design education



春号/Spring

編集：東京工業大学工学部建築学科  
 建築計画第2講座  
 発行：TIT建築設計教育研究会  
 定価：400円

Ka

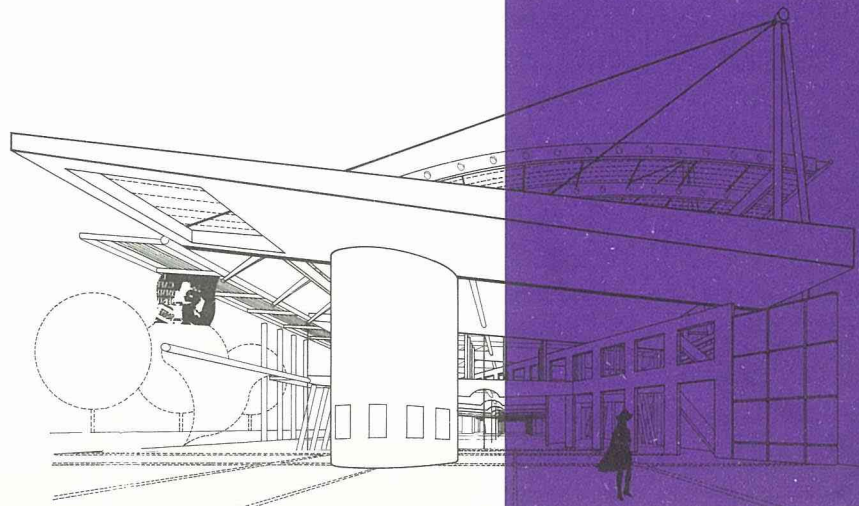
NO.4 1992

「華」は、音で「カ」、訓で「ハナ」と読み、「花」はその略字、俗字である。  
 字の構成は「草、かんむり+葉やハナが生れた姿+発音を示す「手」からなる。  
 重要なのは手(カ・ウ)で、アーチやトーム状を形容し、  
 たとえば「迂回(アーチを描いて曲がる)」、「宇宙(トーム状にかぶさる天空)」という。  
 したかつてその姿をもった草花は、  
 牡丹(ボタン)や芍薬(シャクヤク)のことき大輪を形容し、  
 雑草と区別して、まさに華麗・華美の様(サマ)でなければならぬ。  
 東京工業大学には、工業化社会を築いた東京高等工業学校建築科の  
 明治35年創立以来、地味で着実な学風がある。しかし、これからの情報化社会、  
 国際化社会の中でそうした学風をより活かすには、  
 この学風の成果が大地から華やかに育つことが求められよう。  
 その行為をあえて望んで、本誌を「華(Ka)」と命名する。(内藤 昌)

Our department has maintained a solid and dignified  
 academic tradition since its establishment in 1902  
 when Japan was laying the foundations  
 of an industrial society.  
 In order to put this tradition  
 to good use and to educate  
 our students well  
 while keeping them firmly rooted to  
 the ground and thus able to  
 cope flexibly with information  
 and international society —  
 I give the name "Ka" to this journal.  
 The KANJI reading of "Ka"  
 means a large showy flower  
 such as a tree peony  
 or a herbaceous peony,  
 and the word has connotations  
 of magnificence and grace.  
 (Akira Naito)

1991年度設計製図第Ⅱ(2年生)優秀作品より——2  
 1991年度設計製図第Ⅳ(3年生)優秀作品より——6  
 1991年度卒業設計製図・卒業論文(制作)・修士論文(制作)優秀作品より——15  
 特別寄稿：アントレア・リアーズ——23  
 私の研究テーマ：宮本文人——24  
 東京工大生だった頃：中島 隆——25  
 私の設計教育論：紀谷文樹・仙田 満・茶谷正洋・宮本文人・八木幸二——26  
 先輩、元気ですか(工藤国雄さん、桑原立郎さんを訪ねて)——28  
 海外体験記(ペルラーヘ・インスティテュートでの1年)：柳沢 潤——30  
 当世東工大生事情：伊東龍——31  
 INFORMATION/NEWS——32

Entry for Ochanomizu Station Architectural Competition : KAJIMA Corp. (Norio Kikita Eng. '81)



# 1991年度設計製図第Ⅱ(2年生)優秀作品より

This year's outstanding 2nd-year studio work: Autumn Term

ここに紹介するのは東京工業大学建築学科での1991年度後期の「設計製図第Ⅱ」(2年生対象)の優秀作品の一部である。

学生は前期に西洋古典建築のオーダーや日本古典建築の木割のコピー、および木造の別荘の課題を行っている。

後期の課題は、「低層集合住宅」「矩計図のコピー」「オフィスビル」であり、ここでは第1課題と第3課題の優秀作品の一部を掲載する。

志水英樹(建築計画第3講座・教授) 青木義次(計画基礎講座・教授) 藍澤 宏(建築計画第3講座・助教授)  
Hideki Shimizu, professor Yoshitsugu Aoki, professor Hiroshi Aizawa, associate professor

## project 1

### 〔低層集合住宅〕

Low Rise Housing Development

#### ●テーマ設定

同潤会によって昭和2年に建設された「代官山アパート」(旧渋谷アパートメント)の敷地の一部を再開発し、低層の集合住宅を計画するものである。

かつて同潤会は、都市の幅広い一般大衆の住居を対象とするうえで、単なる住宅プランを提案するだけでなく、そのなかでどんな社会、どんな生活の姿をつくるのかという、今後の都市住宅のモデルとして意欲的な提案をしたように、その同じ敷地に「現代の集合住宅」なるものを提案してもらうことを目的としている。作業が平面プランの計画に終始しないよう、傾斜地、旧アパート群との隣接地、集合して住まうといった条件を与え、敷地と住宅の両方を意識させるよう試みた。

#### ●設計条件

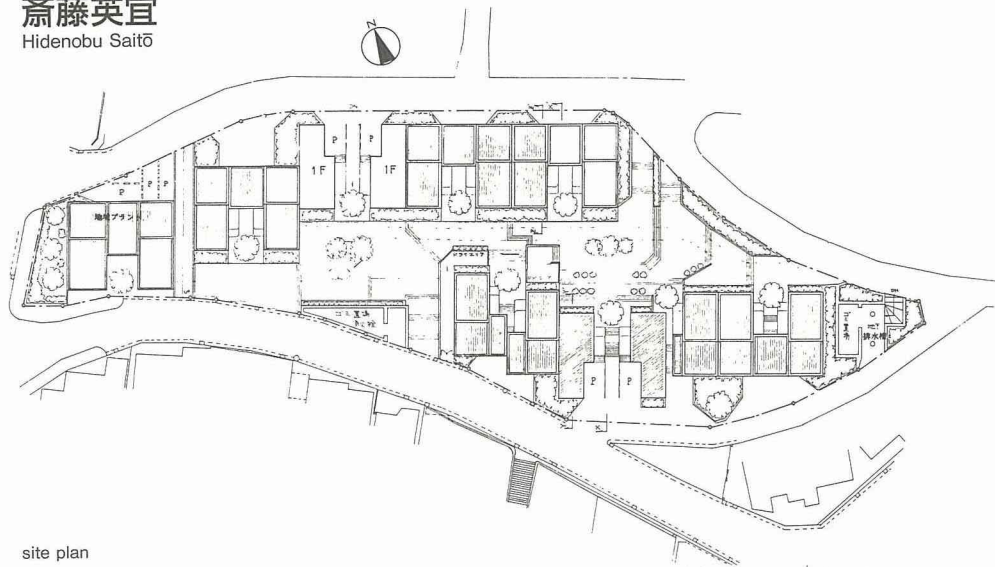
計画戸数15戸以上、各住戸は建築面積60㎡以下、延床面積120㎡以下。住戸の組み合わせは自由、階数は2あるいは3階とし、地階は認めない。構造は鉄筋コンクリート壁式構造とする。

#### ●所用図面

図面はA1ケント紙に仕上げる。

- 1 全体配置図 1/300 方位、植栽、床仕上を表現のこと
- 2 各階平面図 1/100 寸法線、室名、家具配置を記入
- 3 断面図 1/100 2面、各高さ関係を記入
- 4 立面図 1/100 2面、周辺と一体的に表現のこと
- 5 設計主旨 設計意図を簡条書きで3つ記入

#### 斎藤英宜 Hidenobu Saitō



site plan

#### 林 宏規 Hiroki Hayashi



site plan



section

west-northwest elevation



project 3

「オフィスビル」

Office

●テーマ設定

課題は、都市内(商業地域、容積率600%)で公園に隣接した敷地に、低層部に店舗を有する事務所建築を設計するものである。

公園に隣接した敷地としたのは、与えられた敷地の中だけしか考えない建築が多い中で、ひとつひとつの建築が都市を形づくるということを考えてもらいたい、都市内のささやかな公園スペースを生かすことができるのも建築なのだということを理解してもらいたいという、教師から学生へのメッセージである。

また、間口が狭い敷地形状としたのは、店舗と事務所という異なる用途のアプローチが交差する中で、これをどのように処理するか学生に考えてもらいたいという意図である。

●設計条件

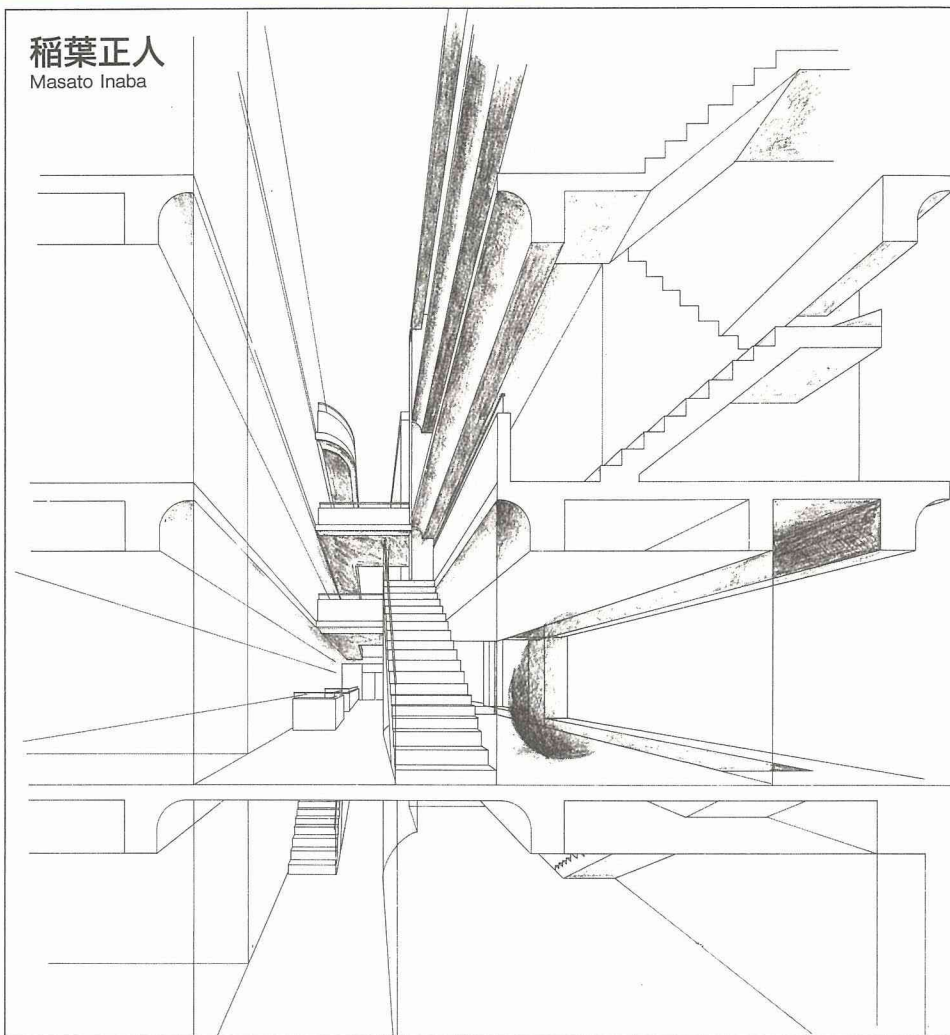
南側に都市公園が隣接する敷地に、8階建ての事務所ビルを設計する。1～2階は貸店舗、3～7階は貸事務室、最上階は管理事務室とする。

●所用図面

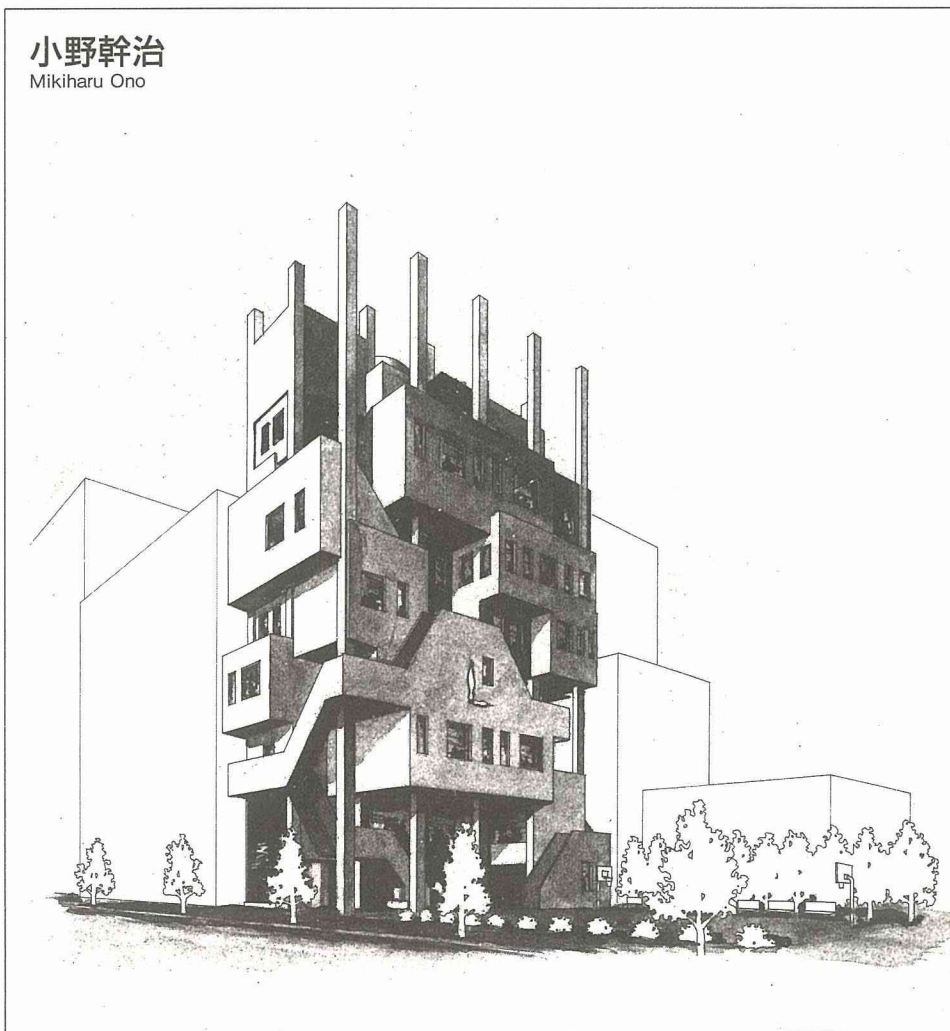
図面はB2ケント紙に仕上げる。

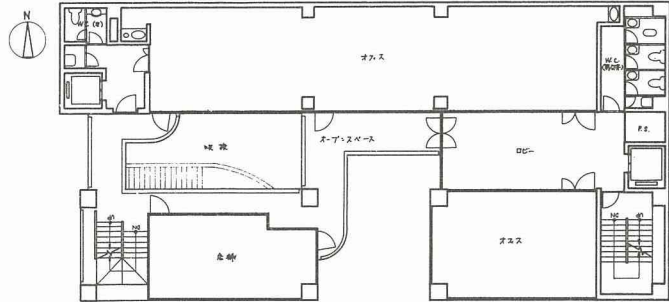
- 1 1階平面図兼配置図 1/100
- 2 2階平面図 1/100
- 3 基準階平面図 1/100
- 4 8階平面図 1/100
- 5 立面図 1/100
- 6 断面図 1/100
- 7 矩計図 1/20
- 8 1・2階断面パース(彩色仕上げ)
- 9 外観パース(彩色仕上げ)
- 10 設計主旨、面積表

稲葉正人  
Masato Inaba

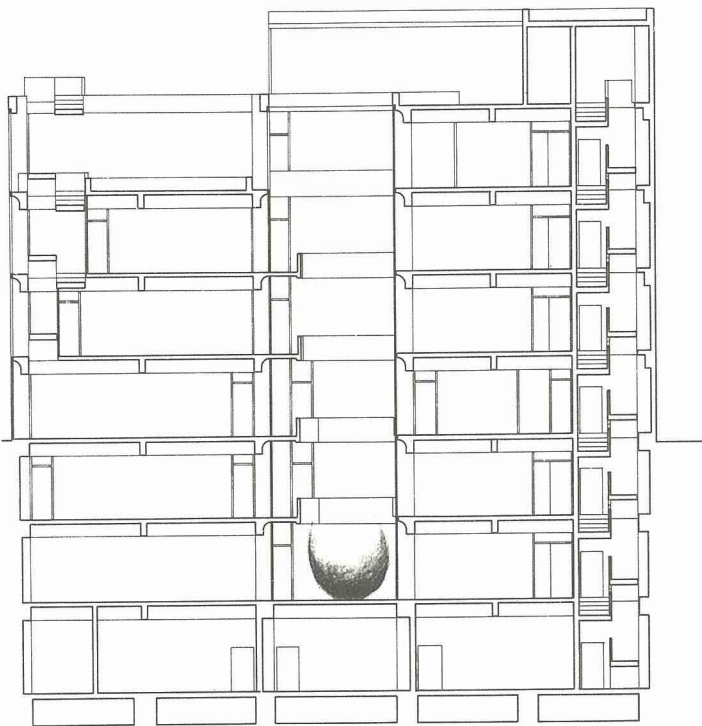


小野幹治  
Mikiharu Ono

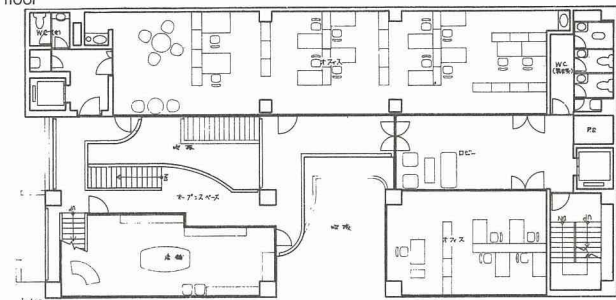




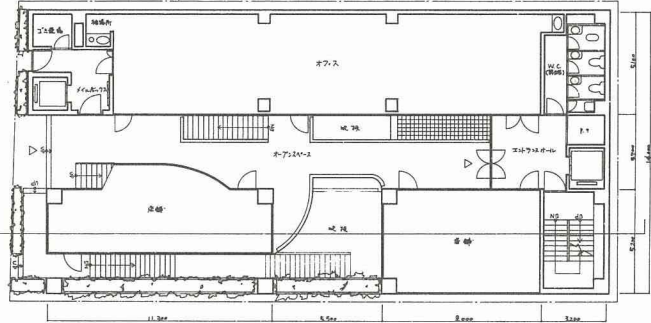
3rd floor



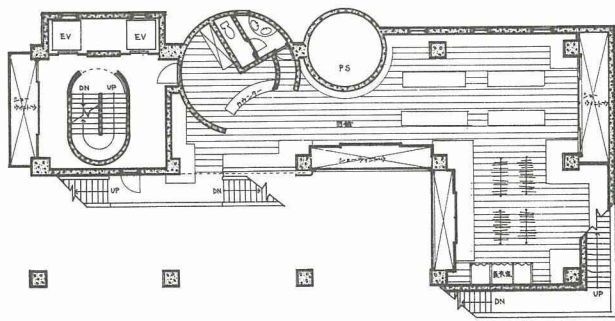
section



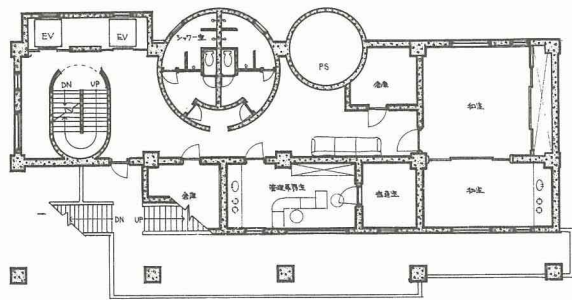
2nd floor



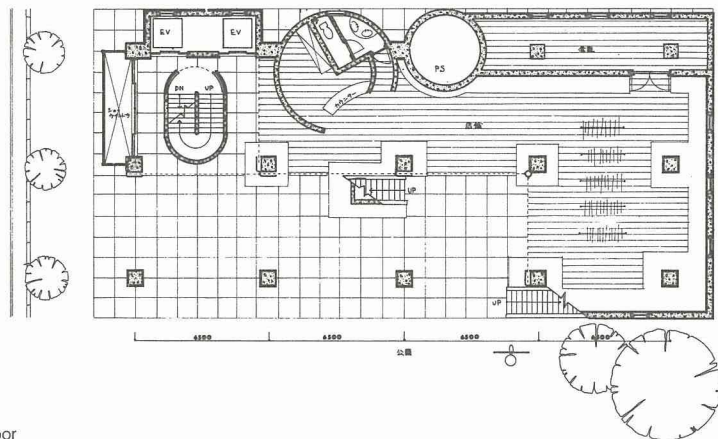
1st floor



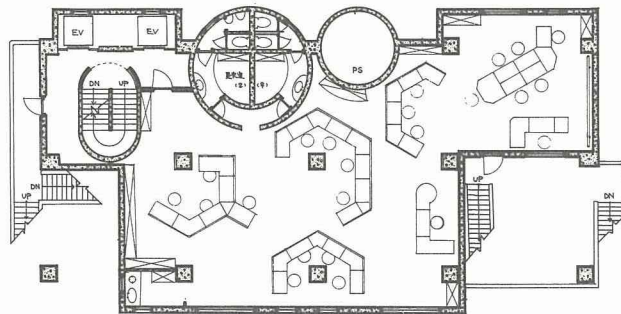
2nd floor



8th floor



1st floor



3rd floor

# 1991年度設計製図第Ⅳ(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work: Autumn Term

ここに紹介するのは東京工業大学建築学科で1991年度後期の「設計製図第Ⅳ」(3年生対象)の3課題の優秀作品の一部である。

本年度の「設計製図第Ⅳ」の課題は、第1課題の「国際建築家交流会館」、第2課題の「新しい都市型集住空間」、第3課題の「都市の複合施設」であった。

## project 1

### 「国際建築家交流会館」

International Center for Architects in Japan

#### 講評

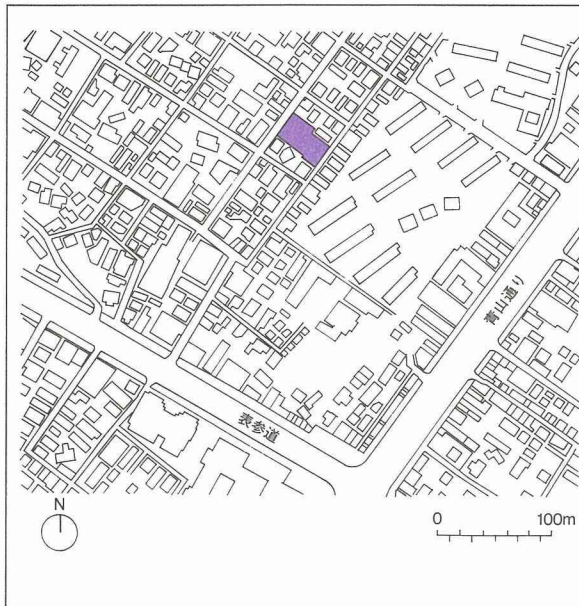
客員研究員 A.P.リアーズ

この課題では、世界の建築家コミュニティのためのゲストハウスを計画した。これは展覧会や会議、講演会の場となるとともに、海外からの建築家、講師、研究者の滞在も可能とする施設であり、内外の建築家の寄り合うクラブハウスともよぶべきものである。計画地は表参道と青山通りの交差点にほど近い、原宿の小さな敷地である。

計画に先立ってまずわれわれは、用途上同類であるゲストハウスや建築研究センター、また建築の形態として同類の修道院や寄宿舎を見なおし、続いて江戸から現代にいたる計画地周辺のフィジカルな歴史コンテクストを調べて、現在の土地利用の図やオープンスペース図を作った。

制作は、施設プログラムと計画地の特性とを把握し、それらをいかした建築的なコンセプトの展開に重点をおいてすすめられた。すなわち、個人のプライバシーや学習と来訪者への公共性を必要とする施設計画上の「内部的」な要求と、稠密な周辺都市環境からくる「外部的」な要求との、相互に相いれ難い2つの要求を同時に解決するべく、筋道をたてて計画を練ってゆく必要があった。

変化の早さにおいては世界でも有数の、東京という都市環境において、ユニークな国際的な建築家コミュニティの場を創ることが課題の主旨である。



- 第1課題：山下和正教授、アンドレア・リアーズ客員研究員
- 期間：10/3～10/31
- 課題主旨：建築家の国際交流のための集会・宿泊施設を東京に設計する。この施設は、展示や会議、講演を行う場であり、同時に海外から訪れた建築家たちが、1週間から1年程度の宿泊をする家でもある。
- 想定敷地：渋谷区神宮前  
面積1024.4㎡
- 施設内容：展示・レセプションホール180㎡、講義ホール135㎡(150～200席)、宿泊施設600㎡(ダブル4室 シングル28室)  
延床面積2000㎡、駐車台数5台以上
- 法規制：容積率300%、建蔽率60%、住居地域、準防火地域、第3種高度地区、日影(4時間、2.5時間、h=4m)

#### 講評

教授 山下和正

今回は、ボストンで活躍中の建築家アンドレア・リアーズ女史の協力を得て、課題を作ることから始めた。設計プロセスの中で、立地のコンテクストを読むことを特に重視することとして、地図を片手に街をまわって具体的な空地を捜し、想定敷地を決めた。

課題の建物の内容は、クラブの性格をもつ共用部分と、ホテルの性格をもつ宿泊部分から成っているが、狭い市街地の敷地の中で、この2つをどのように成立させ、またどのように関係づけるかがテーマとなる。

共用部分については、学生諸君が思考をめぐらせさまざまな提案があったが、宿泊部分については、その配置計画が適切でないもの(開口部が隣地に接するなど)がいくつか目に

ついた。良い居住性をつくりだすということに関して、または何が良い居住性かということに関して、もう少し関心を払ってほしい。

建築全体のモチーフや構成については、明解な主張をもった案が多くみられ、いくつかの異なった面白い建築のタイプが生まれた。これらをすべて紹介できないのは残念である。また、他の課題でもいえることであるが、一般的に学生諸君の提出する図面、パースなどの密度があまり高くないように思われる。いたずらに目地などを装飾的にたくさん書き込む必要はないが、階段や吹抜の正確な表示を心がける他、主要な寸法線、家具配置、陰影、彩色などに、十分気をつけてほしい。また、プレゼンテーションのための時間が十分にとれるよう、作業時間の配分も当初から計画的に考えてほしい。



アンドレア・P・リアーズ (AIA会員) Andrea P. Leers, F.A.I.A.

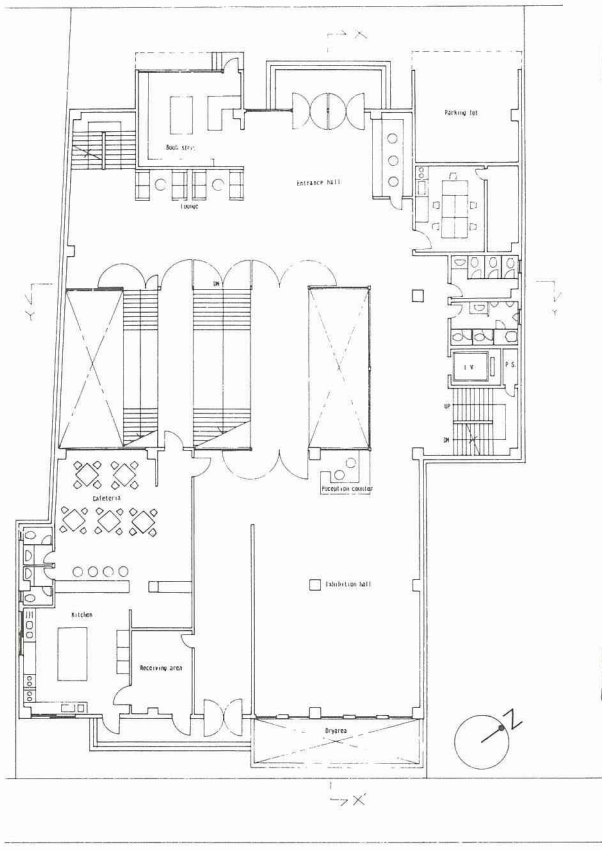
1964年 ウェルズリイ大学卒業。1966年 ペンシルベニア大学大学院卒業。  
1970年 リアーズ・ワインザッフェル・アソシエーツ(ボストン)設立。  
1982年 東京大学へ給費留学(研究・教育)  
1975～78年、1990年 ハーバード大学大学院講師。  
1981～88年 イェール大学講師。  
日本で発表されている主な作品として、ハンスコムフィールド空港トラック車庫、メイン州の休暇住宅(1989年)、フィリップ・エクセクター・アカデミー天文台(1989年)、ボストン地下鉄コントロールセンター(1991年)

# 国際建築家交流会館

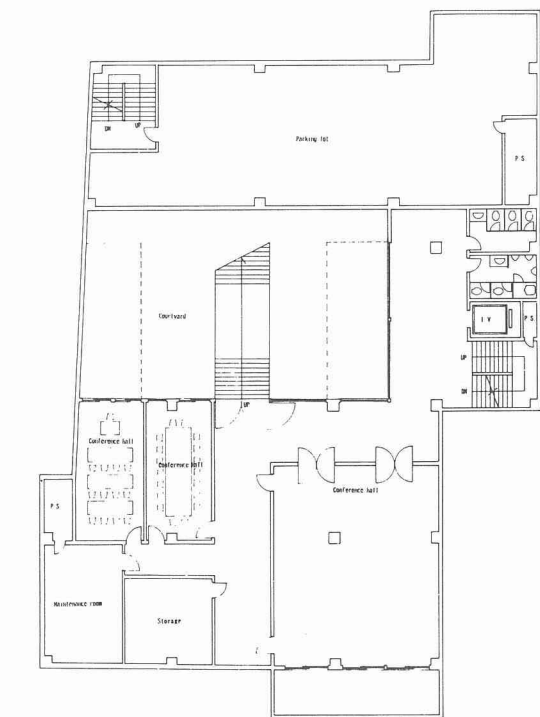
International Center for Architects in Japan

江湖猛敏

Taketoshi Kōko



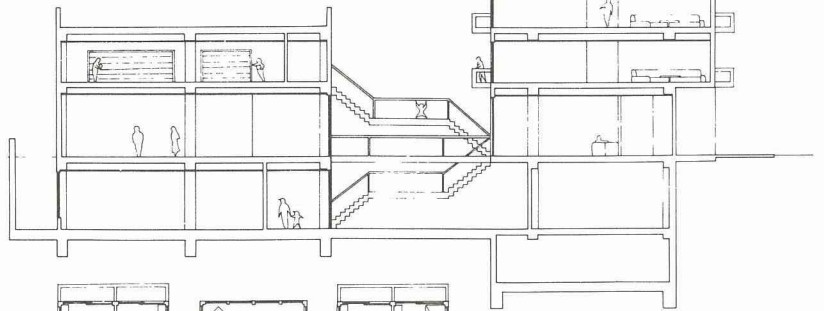
1st floor



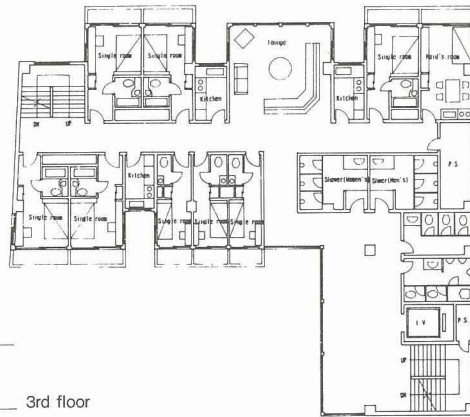
basement floor



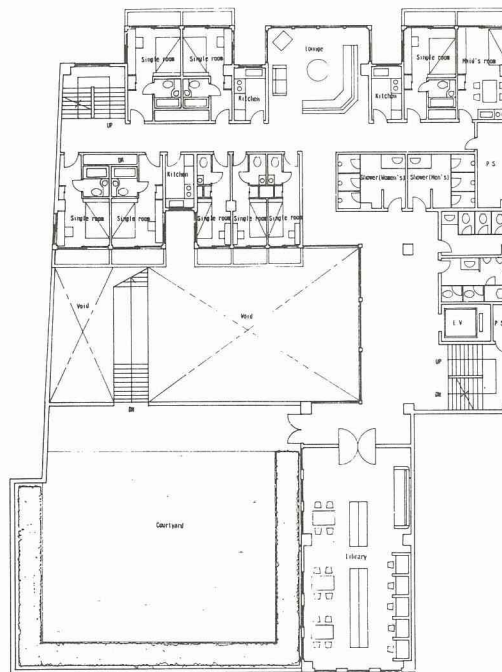
section



section



3rd floor



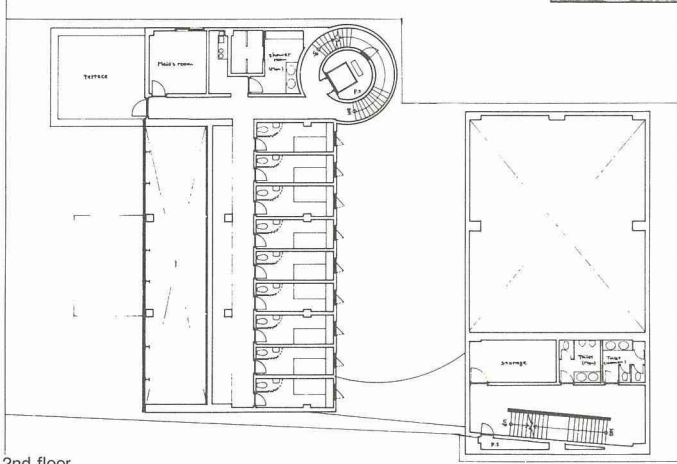
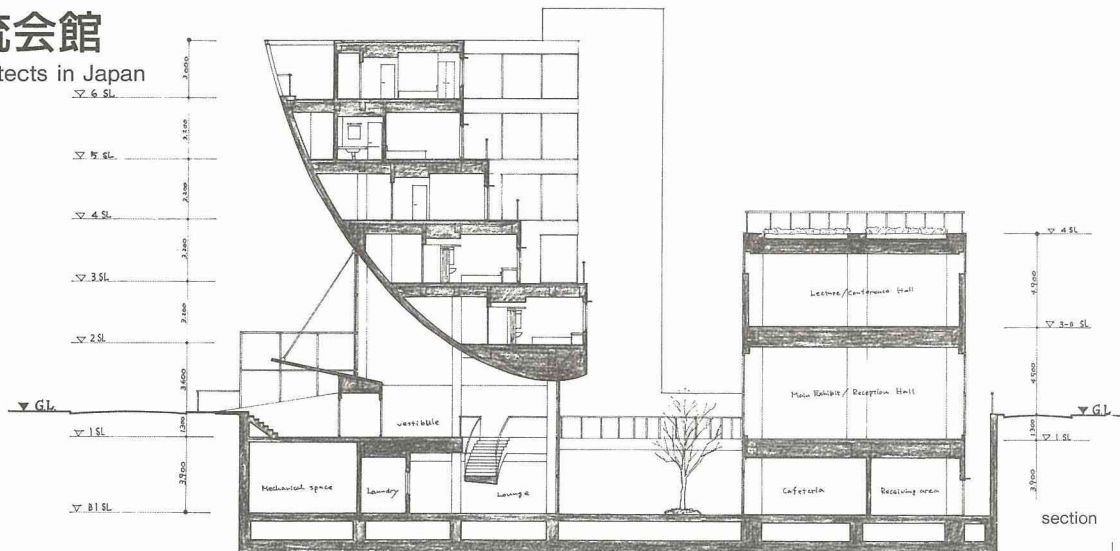
2nd floor

■国際化の著しく進んでいるこの東京にさえも、海外からの来客との交流の場が十分に整っていないのが現状である。そこで日本や海外の建築家たちの宿泊や展覧会、講演会、会議などを可能にする「クラブハウス」を提案する。■内外からの来客を受け入れる性格上、明瞭で快適な空間構成を目指した。エントランスをくぐる非制限的な空間が広がり、中央に位置するブリッジ等が自然光により浮き上がる。これが各々の目的をもって訪れた者たちを展示ホール、会議ホール、カフェテリア、屋上庭園といったPublicな場へと導く。■Privateな場となる宿泊施設は2階から5階に位置し、各層にリビングとしてのラウンジやキッチン、ランドリーが用意され、「住宅」としての機能を果たす。■以上のように、この「クラブハウス」は利用しやすく(Public)、過ごしやすく(Private)、快適に(Service)、建築家という仲間が集い合う場を提供する。

# 国際建築家交流会館

International Center for Architects in Japan

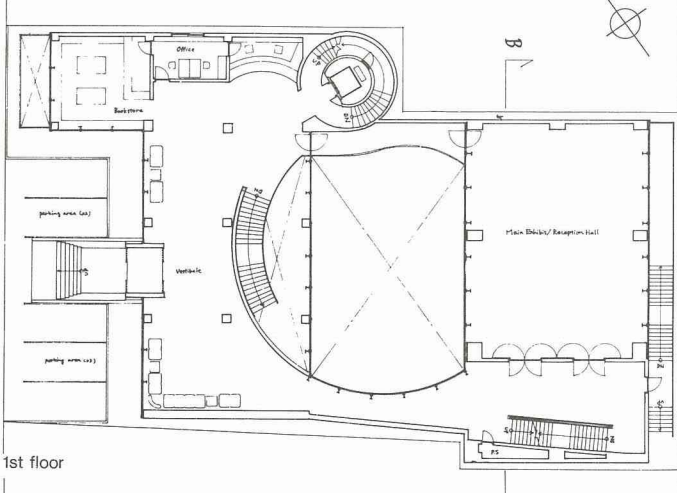
中井敏之  
Toshiyuki Nakai



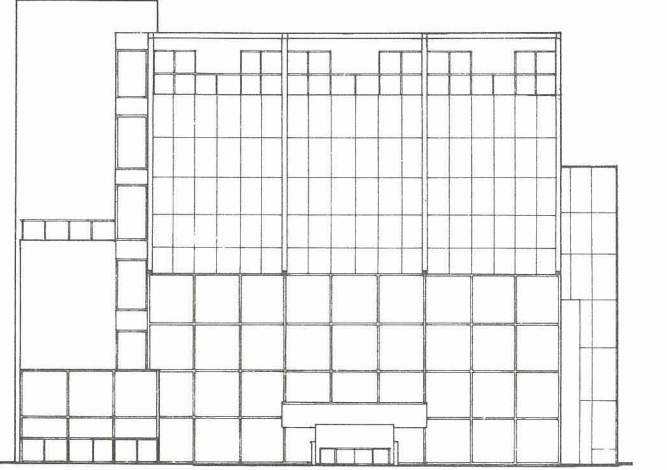
2nd floor



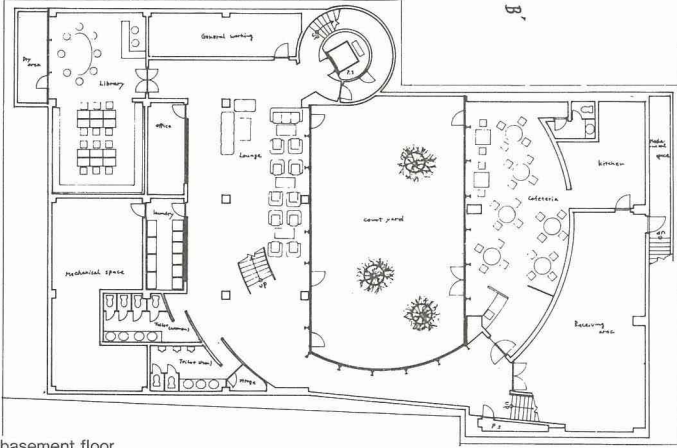
3rd floor



1st floor



southeast elevation



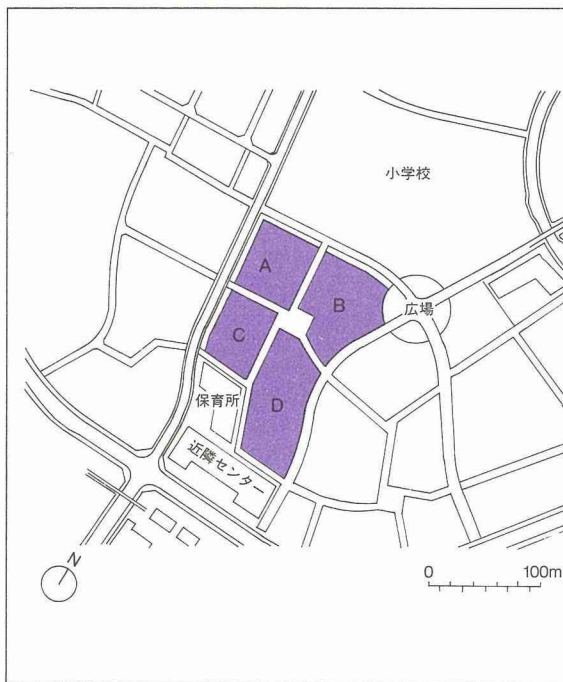
basement floor

■この建物は、円柱、直方体そして放物線状の被膜の3つの部分から成り立ち、それぞれが階段やEV、展示室や会議室および食堂、宿泊施設といった機能をもっている。■その中で、最も特徴があるのは、宿泊施設をもつ放物線状の被膜部分であろう。何故、こうした形態をしているのか？ それには2つ理由がある。ひとつは、宿泊者を優しく包み込むためである。もうひとつは、これが重要なのであるが、さまざまな意味で、「門」を表現するためである。■この被膜は、単にこの施設の

ための門というわけではなく、(もしそうだとしたら、大げさすぎるのは明白である) 建築を志す者の建築界への門と、さらには、理想の建築への門となるようつくられものなのだ。■この門をくぐると、ガラス越しにコートヤードが広がり、それを囲んで、展示会や会議、会食、雑談が行われている。そこにはそこにいる人全員から発散されるエネルギーが渦巻いて存在するであろう。この門をでるとき、そのエネルギーを糧にして、新たななる挑戦に向け、旅立つのである。

project 2

新しい都市型集住空間  
Housing Development



- 第2課題：茶谷正洋教授，藤本昌也講師
- 期間：11/7～12/12
- 課題主旨：複数の建築家が共同で住宅団地を設計するとき，全体的調和を失わないために，デザインコードの策定が重要である。このデザインコードの策定をチームで行い，それによって各自が新たな都市型集住空間の提案を行う。
- 想定敷地：多摩ニュータウン南大沢，4人で1チームを組み，各街区を各々が担当する。
- 住戸数：A/45戸，B/80戸，C/35戸，D/60戸 1住戸あたり90㎡(3LDK)を基準とする。  
(注：その他に共同制作でない課題も準備された。)

講評 非常勤講師 藤本昌也

建築デザインのあり様はいうまでもなく，クライアントやユーザーのニーズを無視して考えられるものではない。しかし，同時に建築をつくるということは，結果として否応なくまわりの生活環境のあり様を規定せざるを得ないことから，建築デザインは生活環境に対する積極的なメッセージとして，またその具体的な空間手法としてもそのあり様が提案されねばならないはずである。

今回の設計課題ではこうした環境づくり(アーバンデザイン)という新しい視点からのアプローチが求められ，しかもグループ制という新しい設計体制が求められたこともあって，学生諸君には多少のとまどいと，手こずった様子がうかがえた。また，成果の点でも意欲だけが空回りして着地がかならずしもうまくいかなかった作品も少なくなかったように思われる。

しかし，今回の課題を通して「住い」の環境づくりが日影や道路斜線，プライバシーといった形而下的な問題も含め，いかに多くの問題を視野に収め，しかも各々に対して市民的共感が得られる客観的判断のもとに進められねばならないかが理解してもらえたと思う。課題の意味が設計の結果よりそのプロセスにあったと考えたい。手かかりとしての空間コンセプトが仲間うちにしかな通用しない一人よがりの私小説的コンセプトであったが故に，また素晴らしい着想にも関わらず客観的技術

のつめが甘いか故に，結局着地がうまくいかなかったのだということを十分認識して欲しい。

個々の作品について講評する余裕がないので，評価に値する代表作を選び掲載することにする。オープンスペースの多様なしつらえ方，建築的スケールに分節化していく住棟の多彩なデザイン手法，屋根景観による街並み形成手法，都市施設導入によるアメニティー環境の演出手法など，チームワークがよくとれた見るべき提案の多い丁寧な作品として評価したい。

講評 教授 茶谷正洋

小さな広場を囲む4つのブロックに，4人で集合住宅を共同設計するか，店舗付き外国人3世帯用の集合住宅を設計するのどちらかを選択することになった。

前者は，都立大学の移転先の八王子南大沢に新しくできた多摩ニュータウンのベルコリーヌの一画で，藤本昌也講師も設計されている。集合による外部空間の扱いがポイントになったが，基本である内部空間のスケールの把握が不十分なままの案は，エスキースの段

階でチェックされた。  
雄弁な言葉でなく，図面表現で物語ってほしいのだから難しい。模型によるプレゼンテーションは効果的だったが，4人で歩調を合わせる訓練は足りない。時間不足に悩みながら，最後にずいぶん頑張った。どちらも敷地にしっかり建ち上るといふ表現力の大小で評価されたと思う。

基本的なスケール感の把握なしに先走るのは，いましめたくなるのは，こちらも齡をとったのかもしれない……。



藤本昌也 Masaya Fujimoto

1937年 旧満州新京生まれ。  
1962年 早稲田大学理工学部建築科大学院修士課程修了。大高建築設計事務所  
1972年 現代計画研究所設立。  
現在，現代計画研究所代表取締役。法政大学工学部建築学科講師，建設省建設大学校講師，木造建築フォーラム理事  
受賞：日本建築学会賞・業績部門(1978年)，BCS賞(1980年)他  
主な作品：茨城県六番池団地，ヨックモック本社ビル，石川県営諸江団地，亀戸・大島・小松川地区E-41街区，ベルコリーヌ南大沢10・11ブロック  
主な著書：『まちの再開発』共著，有斐閣

# 新しい都市型集住空間

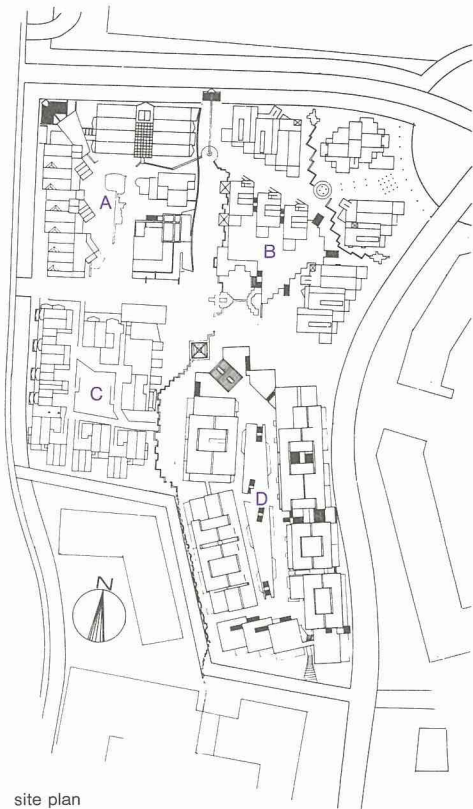
Housing Development

## A 柴田哲司

Tetsushi Shibata



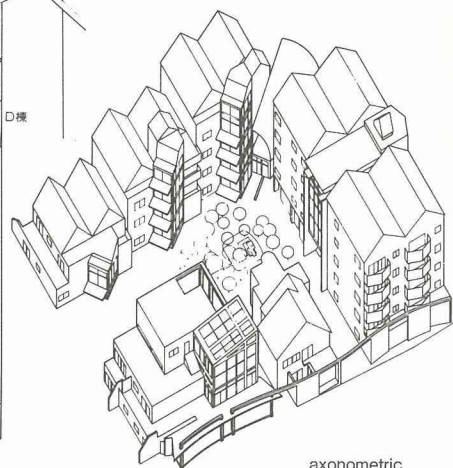
east elevation



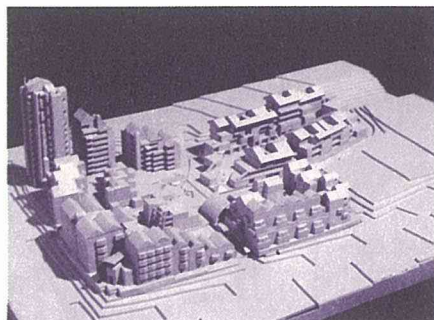
site plan



1st floor



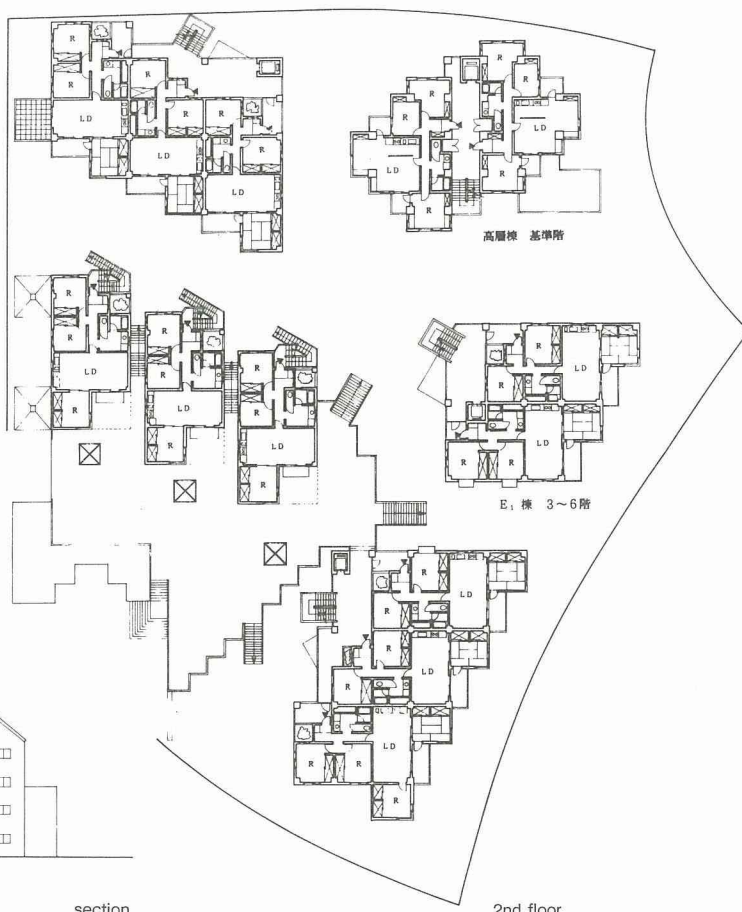
axonometric



A~Dブロック全景

## B 鈴木智明

Tomoaki Suzuki



section

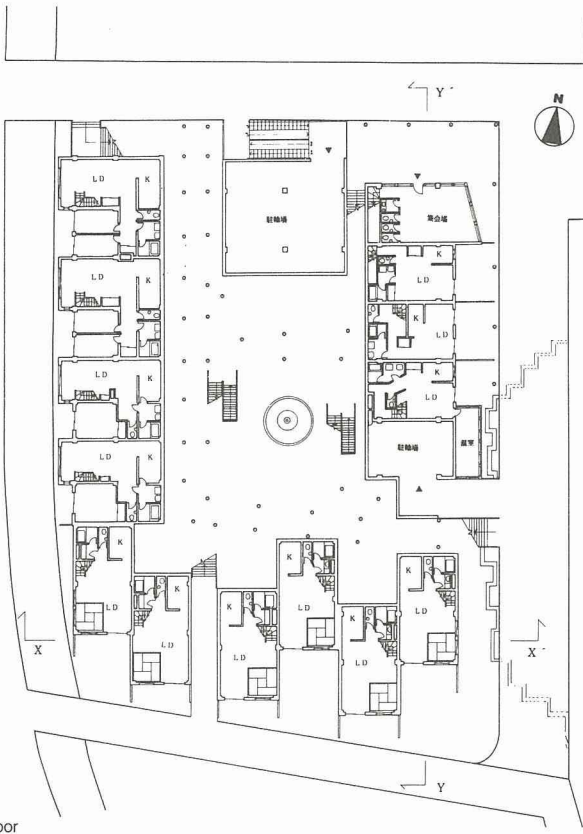
2nd floor

高層棟 基準階

E; 棟 3~6階



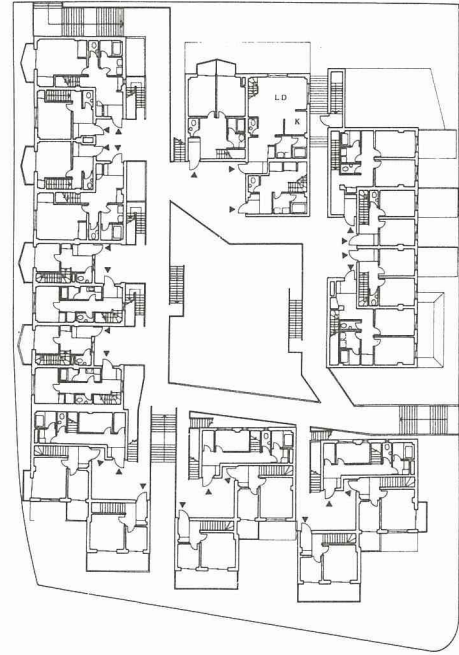
C 小島淑之  
Toshiyuki Kojima



1st floor



section



2nd floor

D 関尾英隆  
Hidetaka Sekio



1st floor

2nd floor



section

■この街区の4つのブロックはそれぞれ個性をもっているが、美しい街並みをつくるためには、それらをふまえながら統一することが必要である。そこでこの街区を形成する共通のコンセプトを以下のようにした。

①街区内の歩車共用道路のうち、南北方向の道路は歩行者専用道路とする。

②歩行者専用道路には水路を設け、またその道沿いは変化のある街並みとし、住民の安全で楽しい憩いの道になるようにする。

③中央の広場に向するように各ブロックとも公共施設をつくり、住民の活動の中心となるようにする。

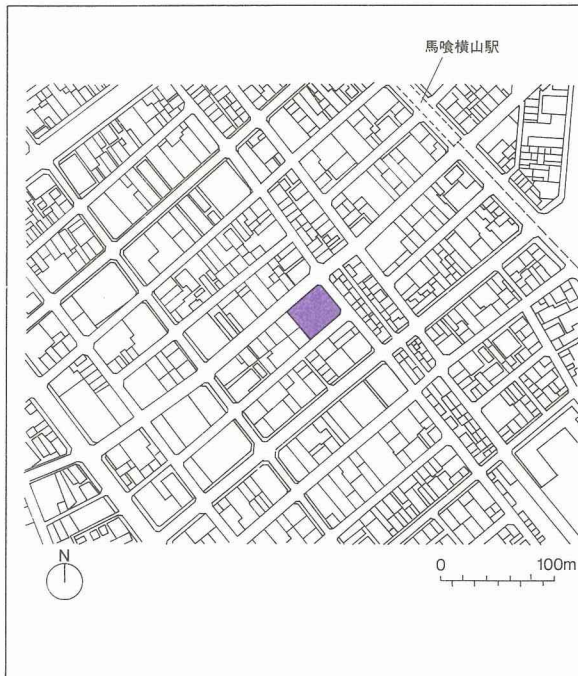
④屋根は基本的に切妻屋根とし、街並みやスカイラインを統一する。

■これらを前提に、各々自分のコンセプトで設計し、かつ隣のブロックとの協調性をもたせて、全体として調和のとれたまとまりのある街区になるようにした。

project 3

『都市の複合施設』

Urban Complex



- 第3課題：山下和正教授，茶谷正洋教授，小倉善明講師
- 期間：12/16～2/3
- 課題主旨：住居の併設が義務化されている中央区の敷地に，オフィスと住居を主とし，店舗を併設した複合建築を設計する。将来，周辺の建物がつくり替えられていくとき，そのプロトタイプとなる提案が求められる。
- 想定敷地：中央区日本橋富沢町 面積1407.9㎡
- 施設内容：業務施設 延面積の75%程度  
居住施設 延面積の15%程度(約85㎡，約50㎡の住宅を組み合わせる。)
- 商業施設 面積は任意，駐車台数24台以上
- 法規制：容積率600%，建蔽率100%（総合設計制度を利用した場合，容積率650%，建蔽率60%）商業地域，防火地域

講評

非常勤講師 小倉善明

「都市の複合施設」のテーマで，学生諸君に期待したことは，ひとつの建築の内にオフィスと住居という異なる空間をどのように組み合わせるか，建物と周辺環境をどのように考えるかということである。

提出された作品は，想像していたよりもバラエティーに富み，新鮮な切り口のものがあつたが，コンセプトを発展させてそれを建築にするという意気込みがいまひとつであった。

関尾君の作品は，剛性の高い組み柱を用いて大スパンの架構を提案している。1階廻り，オフィス階ともに自由度の高い平面計画を実現しているが，組み柱の外側の柱の構造上の整合性にやや欠ける。住居群は最上階のトラスから，吊り下げられている。この扱いで中間階に上からの圧迫感のない外部空間と最下階の住居など面白い内部空間が生まれている。

柴田君の作品は，全体の系がいまひとつ見えない。基準階の平面や中間階の屋上庭園もいまひとつまとまりがない。住居部分は上階ほどまとまっている。11～13階の中央の2つのユニットはもう少し考える必要があつたのではないかと。もう少しつめると良くなる案だけに，あいまいな点が気になる作品である。

両君および学生諸君全体に共通して感じたことは，住宅に対する生活感覚が欠如していること。リビングルームに対する考えが貧弱。スケール感のなさも気になる。両君の1～2階廻りの階段の段数や踏面の幅など，詳しく

見てください。ちょっとしたクイズものです。

また，図面には主要寸法や室名をきちんと書き込み，発表の際には自分の氏名を名乗って欲しい。

講評

教授 山下和正

都心の人口が減少しつつあることから，住居を含んだ複合建築のあり方が模索されるようになってきている。異質な用途を複合させることは，むつかしい問題も発生するいっぽう，さまざまなメリットを創り出す可能性も生まれる。3年生の最後の課題ということもあつて，複合性が高く，少々ひねった出題内容であつた。多くの諸君は，下層部をオフィス，上層部を住居としたが，一部には縦割りとした案，住居を上下層に分けた案などもあつたが，あまり成功しなかつた。住居の計画で，生活実感のないプランが多いのがやはり気になった。また，このような複合用途の建物において，居住者が生活をする上でどのようなことを気にするだろうかといった，いわば市民感覚のようなものを学生諸君はあまり考えない傾向がある。また，このことはオフィス部分についても，執務空間を機械を並べるためだけのような非人間的空間で事足りるとす

る傾向とも共通するよう思われる。

それにしても1学期3課題は少々きついようである。来年度からは2課題～2課題半とすることを検討したい。

講評

教授 茶谷正洋

下町のビル化が，公開空地をもつ総合設計制度による容積率の緩和が進むなかで，住宅併設による都心人口の過疎化対策が講じられている。そんな状況の敷地が与えられた。小倉善明講師の計画した図は，学生には伏せられた。コンセプトがまとまるまでの時間が不足することは同情するが，アメリカ流にこうしなさいと指示できない。

オフィスと住宅の動線をどう分離し，避難階段を共有するかといった内容は，クイズのようで，割り切り方の単純な案の方がうまくいった。テナントのことを考えるより，自社ビルにする方が楽だった。三方道路だが，北向きというのは実際に多いかもしれない。そんな場でどうファサードを形成するのか難しい。実務を通して小倉講師の設定する実際の敷地は，学生には難しいけれど，それだけ実社会の息吹きを感じ得る。今度は僕も，学生の一人になって参加してみたい。



小倉善明 Yoshiaki Ogura

1937年 東京生まれ

東京大学工学部建築学科，ハーバード大学大学院建築学科卒業。

1962年 日建設計工務（現・日建設計）入社

現在，常務取締役 設計担当

主な作品：三井物産本社ビル（1976年，BCS賞受賞），新宿NSビル（1982年，日本建築学会賞，BCS賞受賞），三井海上火災本社ビル（1984年，BCS賞受賞），大宮ソニックシティ（1988年，BCS賞受賞），聖路加国際病院（1992年）他。

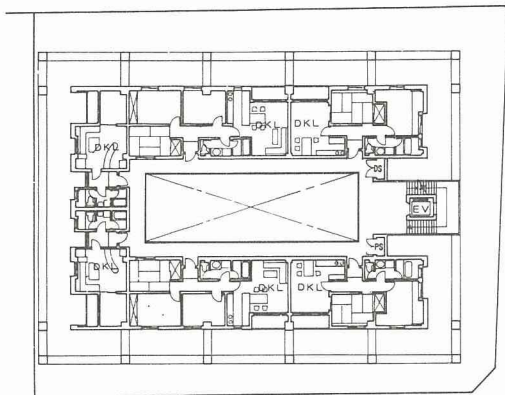
主な著書：『オフィスルネサンス』共著，彰国社

# 都市の複合施設

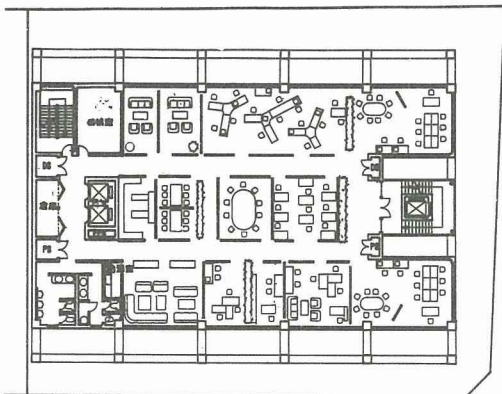
Urban Complex

関尾英隆

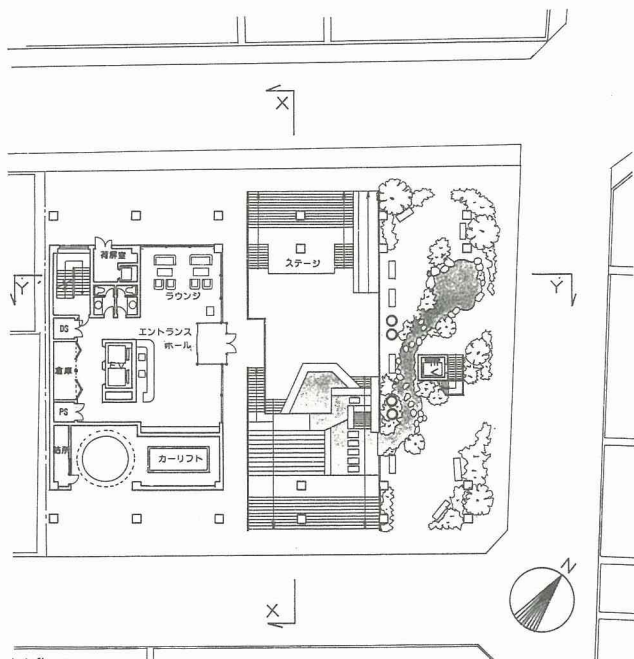
Hidetaka Sekio



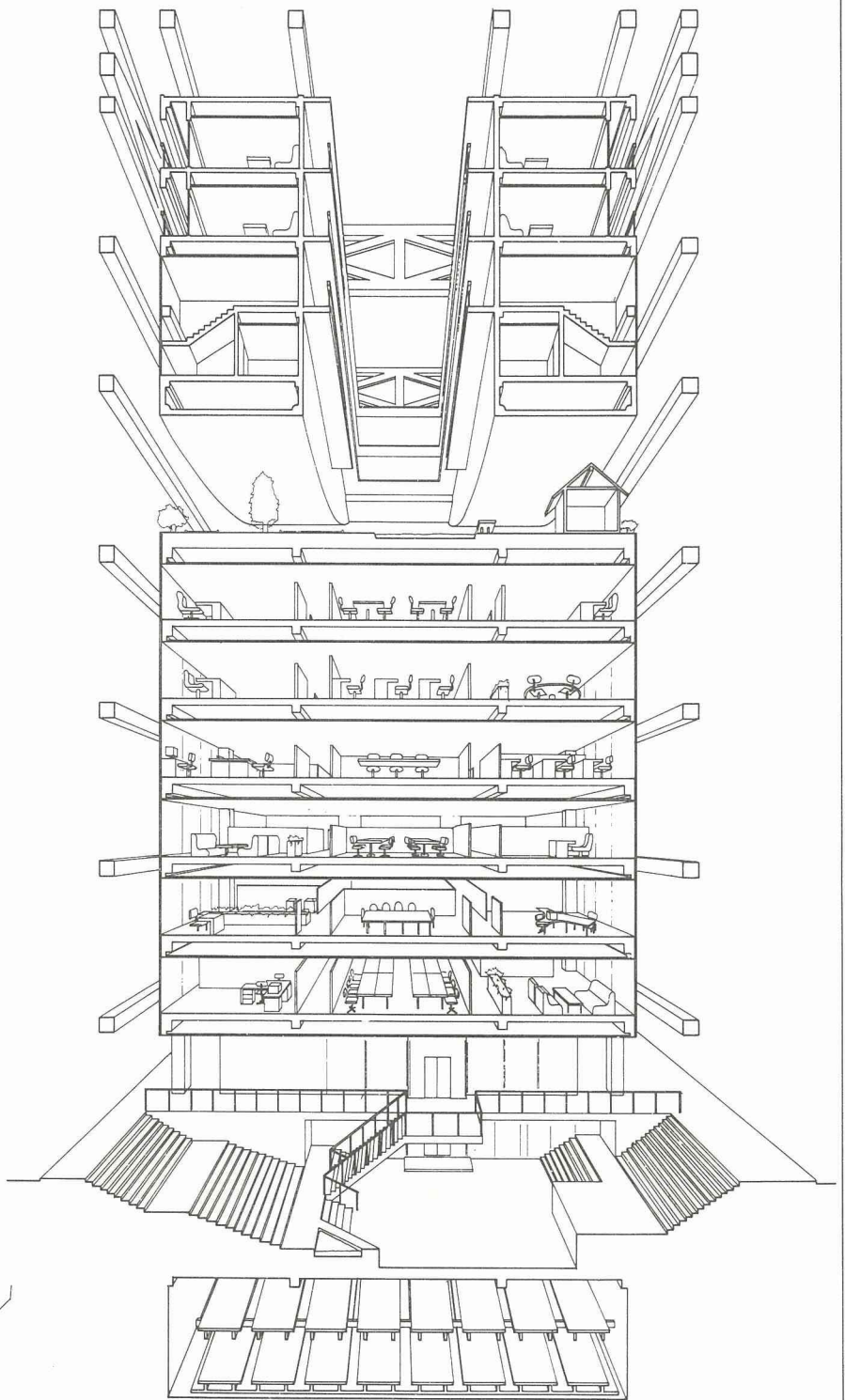
12th floor



typical floor(3rd~8th)



1st floor



sectional perspective

■複合施設には多くの問題が生じる。多量の駐車スペース、有効に使える公開空地、利便性のよい店舗、広い執務スペースをもったオフィス、環境のよい住戸ユニット、オフィスと住戸の関係、日照問題などがあげられる。■広い執務室を確保するには、大スパンが必要となり、また住戸は小分けされるため、必然的に小スパンとなり、少しでも環境の良い上空へと持ち上げられることになる。その解決策がスーパーストラクチャーで支えられたオフィス階、トラス階から吊られる懸垂曲線(カ

テナリー)によって支えられた住戸階となった。■相異なるこの2つの構造を1つの建物に取り入れるため、各々を明確に分離することでその衝突を回避した。この2つの世界に、よりドラマチックな印象を与えるため、素人にも一見して分かるような明快さをもたせた。■この構造により、767㎡の無柱空間が確保され、開放性の高い、オフィス、空地、屋上庭園がとれ、それらをフレキシブルに利用できることとなった。

# 都市の複合施設

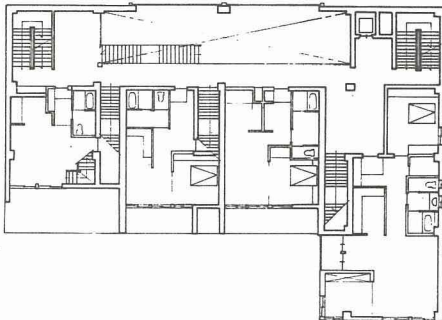
Urban Complex

柴田哲司

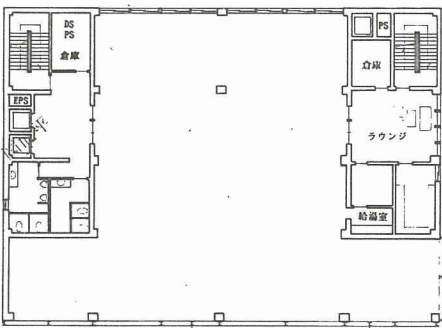
Tetsushi Shibata



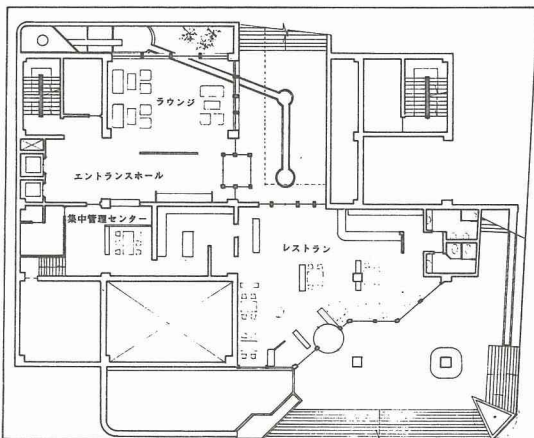
14th floor



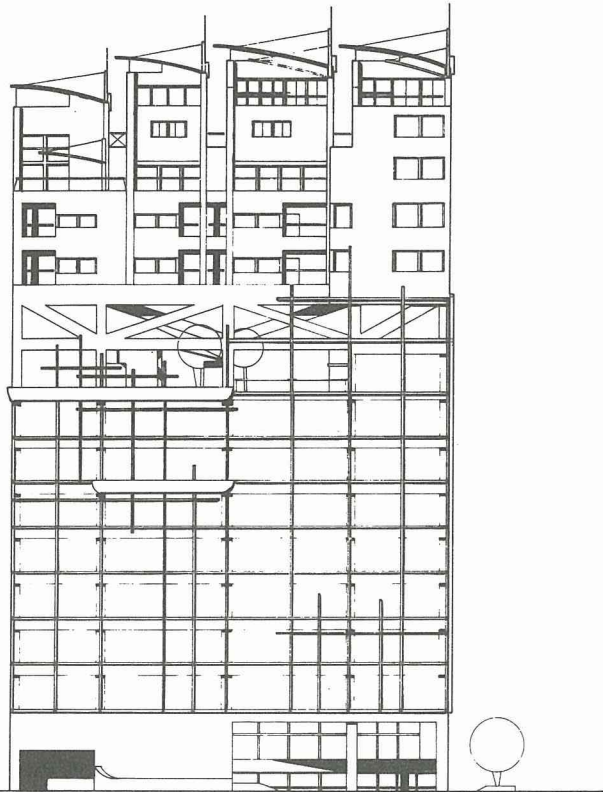
13th floor



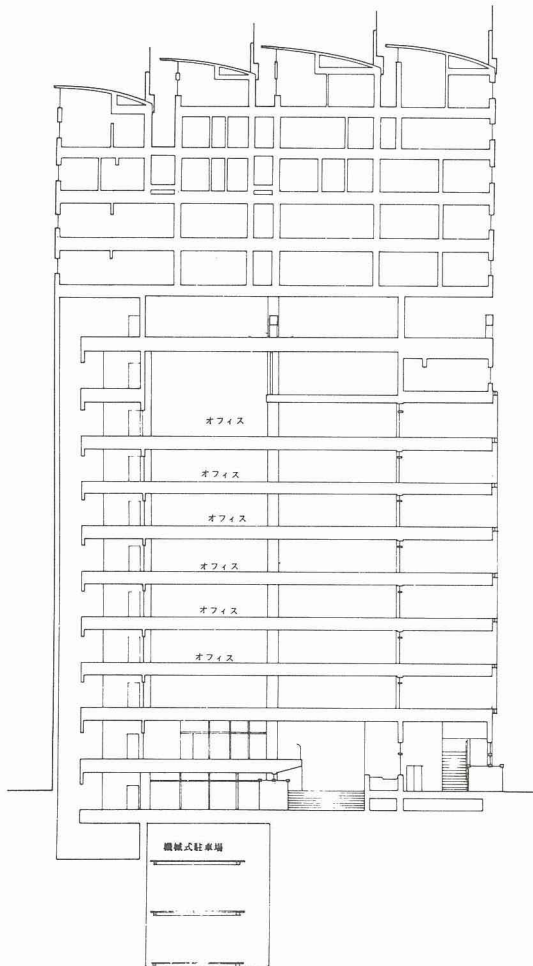
typical floor(3rd~8th)



1st floor



southwest elevation



section

■敷地は三方を道路に囲まれ、メインアプローチを北側に有することになるが、地上7階程のレベルにおいて南側に十分に開けた空間が期待できる。■住居とオフィスの複合施設はそれぞれに要求される空間特性があり、それを解決するため、ここでは東西に配されたコアを主な構造体としている。これによりオフィスフロアにおいては大スパンが得られることとなる。また上部住居部分の小さな空間群をつくるため10階部分をトラス階とし、その上に個別住居をつくった。住居へのアプローチを極力明るくし、住居同士を分離させることで陰湿なビル内住居からの脱却をはかっている。■本来オフィスと住居はその使用時間が一致しない。そのことがこの建物の性格を特徴づけた。両者の接点は9階の屋上庭園と、1, 2階部分に限られる。将来的にこの地区に同様の建築を期待し、オフィスと住居の間に第2の地盤面ができ、自由に往来が可能となればこの計画の目的がより達成されるであろう。

# 1991年度卒業設計製図・卒業論文(制作) 修士論文(制作)優秀作品より

This year's diploma design, graduation thesis/design thesis, and master's thesis/design thesis

ここに紹介するのは、上記3部門での優秀作品合計7点である。

いずれも紙面の都合で全図面の一部しか紹介できず残念である。これら以外にも載せたい作品は多い。

また卒業論文(制作)の部門は次年度以降は中止とされ、全員が論文を提出することとなった。(教授 山下和正)

## 卒業設計製図

4年生全員提出

伝統的に行われている学部の卒業設計で、今年度は69名が提出した。卒業設計のテーマはいろいろな意味でその時代を反映するものである。カテゴリー別に集計した結果は下記の通りである。

- (a) 駅舎または駅前の再開発計画 —— 16点
- (b) 商業施設、ホテルまたはその複合施設 —— 14点
- (c) 社会福祉、社会教育等の施設 —— 10点
- (d) 博物館、図書館、劇場等の公共文化施設 —— 7点
- (e) 一般的再開発計画(駅以外) —— 7点
- (f) 住宅、集合住宅またはその団地 —— 6点
- (g) 公園、広場 —— 5点
- (h) その他 —— 4点

特徴的なことは都市内の駅や駅周辺の錯綜した立地条件に人気があり、これを含めた複雑で大型の再開発計画に1/3の学生諸君が取り組んだということは興味のある事実である。文化センターや集合住宅地開発計画などに人気のあった時代もあったが、この変化をどう読めばよいのだろうか。

大岡山建築賞のための計画系教官の投票による上位の作品は下記の通りであった。

- (1) 陸 鐘驍(ロウ・シーアン)「TRANS SPACE——上海証券交易中心」(山下研究室) P16参照
- (2) 寺崎 徹「王子・水辺の文化施設計画——街なかの親水空間の活用」(山下研究室) P17参照
- (3) 谷口知史「リバーフロント・コンプレックス建築計画」(山下研究室) P18参照
- (4) 日下雄一郎「北千住駅再開発計画」(志水研究室) P19参照
- (5) 杉野義人「新宿駅南口前複合商業施設計画」(鈴木・小河研究室)
- (6) 篠塚 勉「WORKSHOP SQUARE」(山下研究室)

なお69名のうち2名については、発表会の結果により再提出となった。

## 卒業論文(制作)

4年生の選択

指導教官の指導の下に卒業研究を行った成果が卒業論文であるが、これは論文の代りに制作(卒業設計と区別するために従来卒業制作と呼んでいた)を行うものである。一昨年度は8名の学生が卒業制作を行ったが、昨年度は下記の5名がチャレンジした。

- (1) 篠塚 勉「都市型高齢者福祉施設的设计手法の提案」(山下研究室)  
大田区が計画している敷地に養護老人ホームを設計し、子供の家を併設した。
- (2) 高森和志「都市型複合ビルの研究とその具体例の提案」(山下研究室)  
赤坂のN Jホテル跡地を敷地に想定し、店舗、ショールーム、オフィスなどの複合ビルを計画した。並行する2列の棟の中間に大アトリウムを導入、ここに建築表現をつくりだしている。(P20参照)
- (3) 谷口知史「星田ふれあいクラブ——新しい街づくりにおけるコミュニティスペースの提案」(山下研究室)  
大阪府星田のニュータウンの民間ディベロッパー開発住宅地に住民が自主運営するコミュニティづくりのための文化施設を計画した。(P21参照)
- (4) 寺崎 徹「公共施設と住民の結びつきについての研究——具体的事例を通しての計画手法の提案」(山下研究室)  
我孫子市に計画されている文化施設用地に、プログラムを若干変更して設計した。建物1階を縦貫する公共道路が特徴。
- (5) 陸 鐘驍(ロウ・シーアン)「晴海三丁目集合住宅団地の計画——都市型集合住宅地の住環境の研究」(山下研究室)  
晴海地区を再開発する想定で、超高層、高層、住棟よりなる大規模な住宅地計画である。景観づくりにも意をそそいだ。  
図面表現の上では、不十分と思われる面もあったが、事例または立地調査→問題点抽出→解決手法の提案→設計といったストーリーは大旨成立していたと思われる。

## 修士論文(制作)

修士2年生の選択

大学院建築学専攻の修士論文の代わりに、制作(設計作品)を提出するものであり、35名中3名が選択した。提出者とそのテーマは下記の通りである。

- (1) 吉永健一「駅舎建築における機能の複合性と都市性——JR大阪駅改築計画」(坂本研究室)  
世界各地の駅舎建築を調べ、その特性としての複合性、都市性に着目し、それを大阪駅の改築計画に適用した。太鼓橋のような大規模なオーバブリッジを駅の東から西へ架け、その上を公園としている。(再審査予定)
- (2) コヴァーチ・ベンツェ「世界の建築博物館の現状分析をもとにした新しい建築博物館の提案」(藤岡研究室)  
世界各地の建築博物館の現状を調べ、そのほとんどが古建築の保存と再利用を兼ねていることに着目し、同様な計画を東京で行った。保存対象を丸ノ内の明治生命本館とし、隣地を含む総合的再開発計画も併せて行っている。(P22参照)
- (3) 柯 摩赫(ファ・モーハック)「建築における尺度とその手法——秋葉原駅前市場跡地計画」(坂本研究室)  
尺度(スケール)に関する多くの事象を調べ、それを応用するという形で計画を行ったものである。秋葉原という地域特性を生かした計画となっている。  
35名中、制作を選択したのが10%に満たないわずか3名では少々寂しい。また作品内容についてももう少し高い密度を期待したい。  
コヴァーチ・ベンツェ君の「建築博物館」については、図面表現は地味なものであったが、調査、企画、開発計画、改築デザイン、新築部分のデザイン、展示計画、プレゼンテーションなど全般的にバランスのとれたものであった。展示が建築そのものであるだけに、展示計画をもう少し具体的に計画し説明すれば、よかったと思われる。

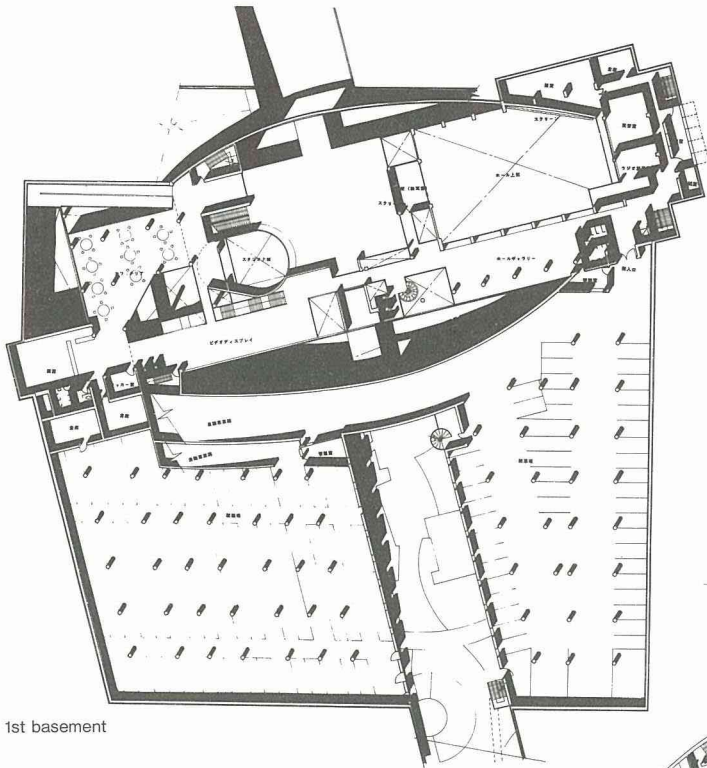
# TRANS SPACE—上海証券交易中心

Trans Space-Shanghai Stock Market

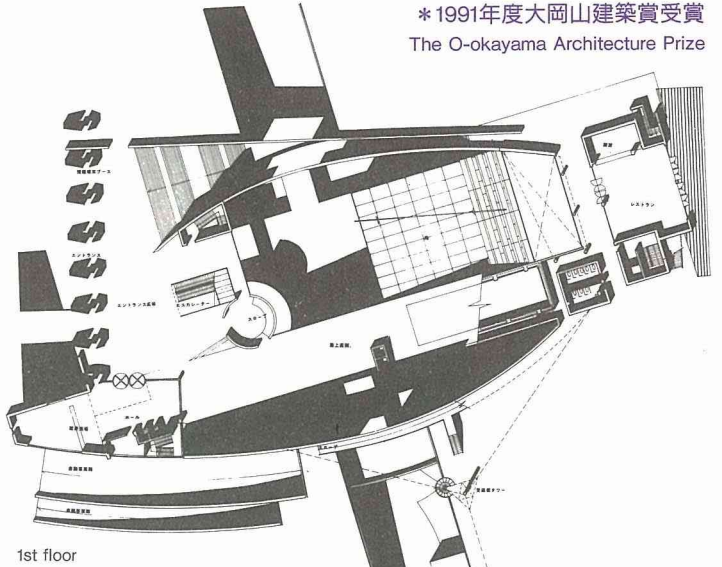
卒業設計製図

\* 1991年度大岡山建築賞受賞  
The O-okayama Architecture Prize

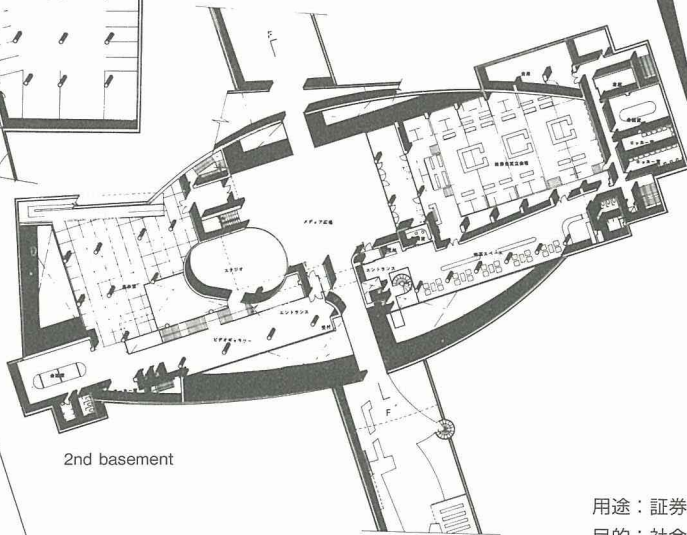
陸 鐘驍 (山下研究室)  
Sean Loh



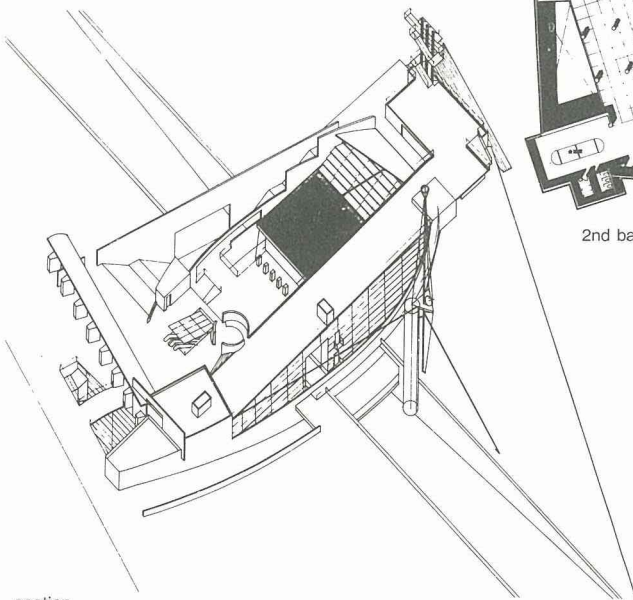
1st basement



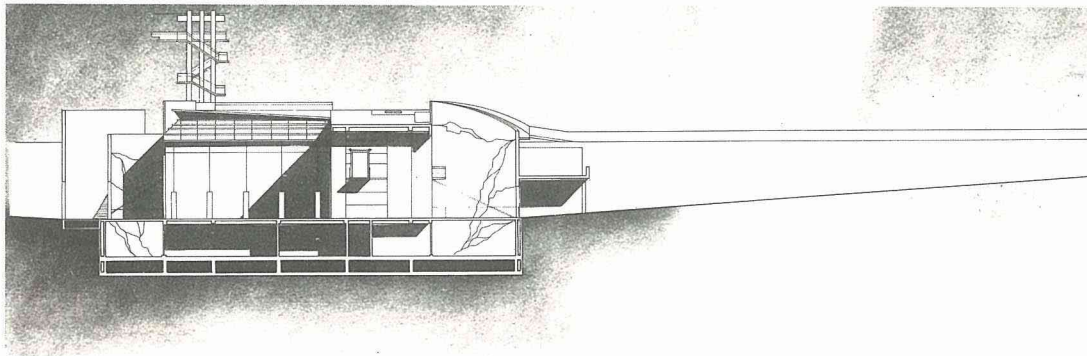
1st floor



2nd basement



section



用途：証券取引センター

目的：社会主義システムの中に資本主義経済の機能を導入し、中国の経済改革を促進することを試みる。

機能：証券取引所、放送通信施設、教育施設、サービス施設、公園、広場

敷地：中国、上海・黄浦公園内

計画：既存の街並みと公園景観を保存するために建物全体を地下に埋めることにした。交通ターミナルを結ぶ軸線の真中に配置し、その両側に9mレベルまで掘り下げるスロープ公園をつくり、中にビデオギャラリー、シミュレーションゲームブース、野外劇場などの教育施設を点在させた。人びとはこれらの施設にふれながら、センターへたどりつく。また、証券取引機能が不要でなくなった時には、文化施設としての使用も可能となるよう計画した。

主旨：事件の記憶と忘却の狭間にある建築である。

参考：『メトロポリス』ドイツ映画(1927年)

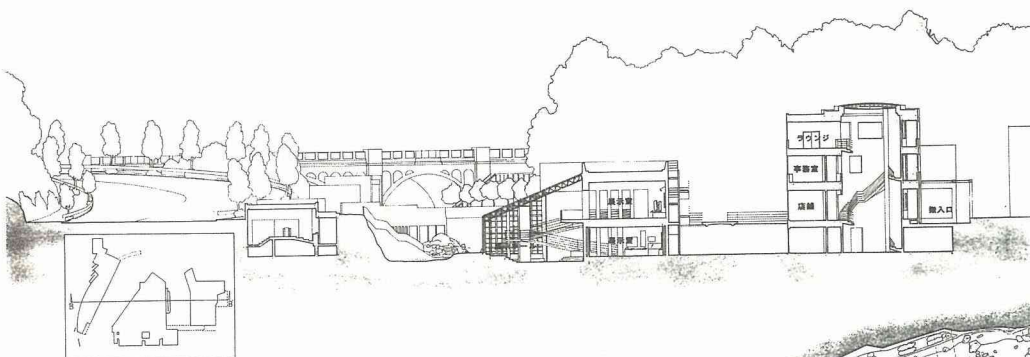
# 王子・水辺の文化施設計画

街中の親水空間の活用  
River-front Cultural Center, Ooji

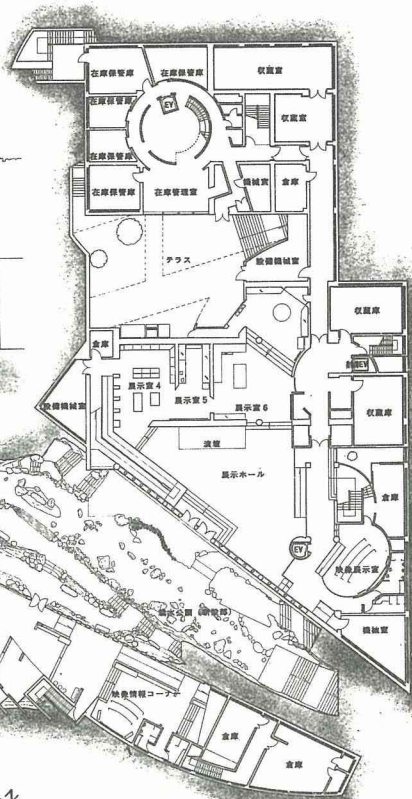
卒業設計製図

\* 1991年度大岡山建築賞受賞  
The O-okayama Architecture Prize

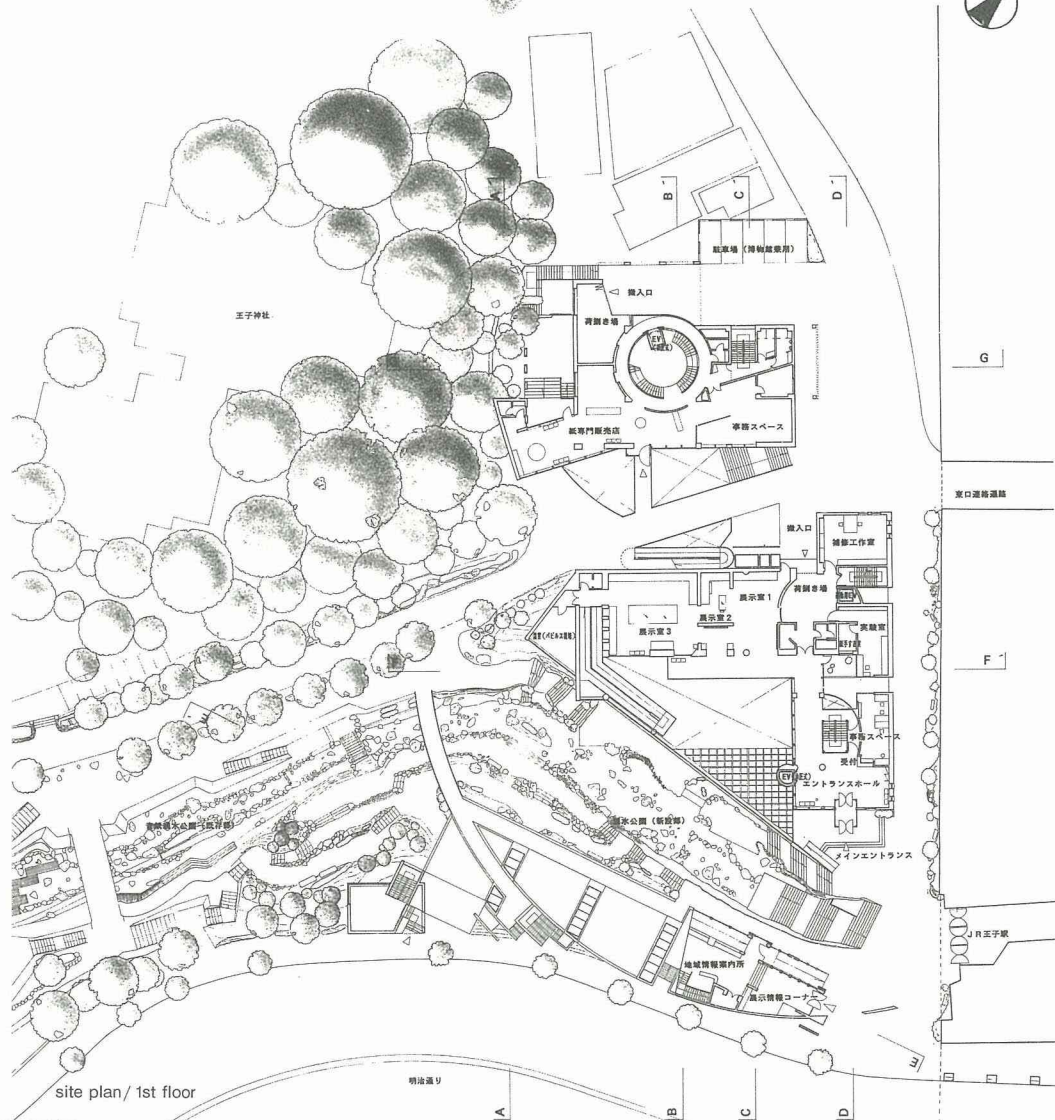
寺崎 徹 (山下研究室)  
Tōru Terasaki



c-c section



1st basement



site plan/ 1st floor

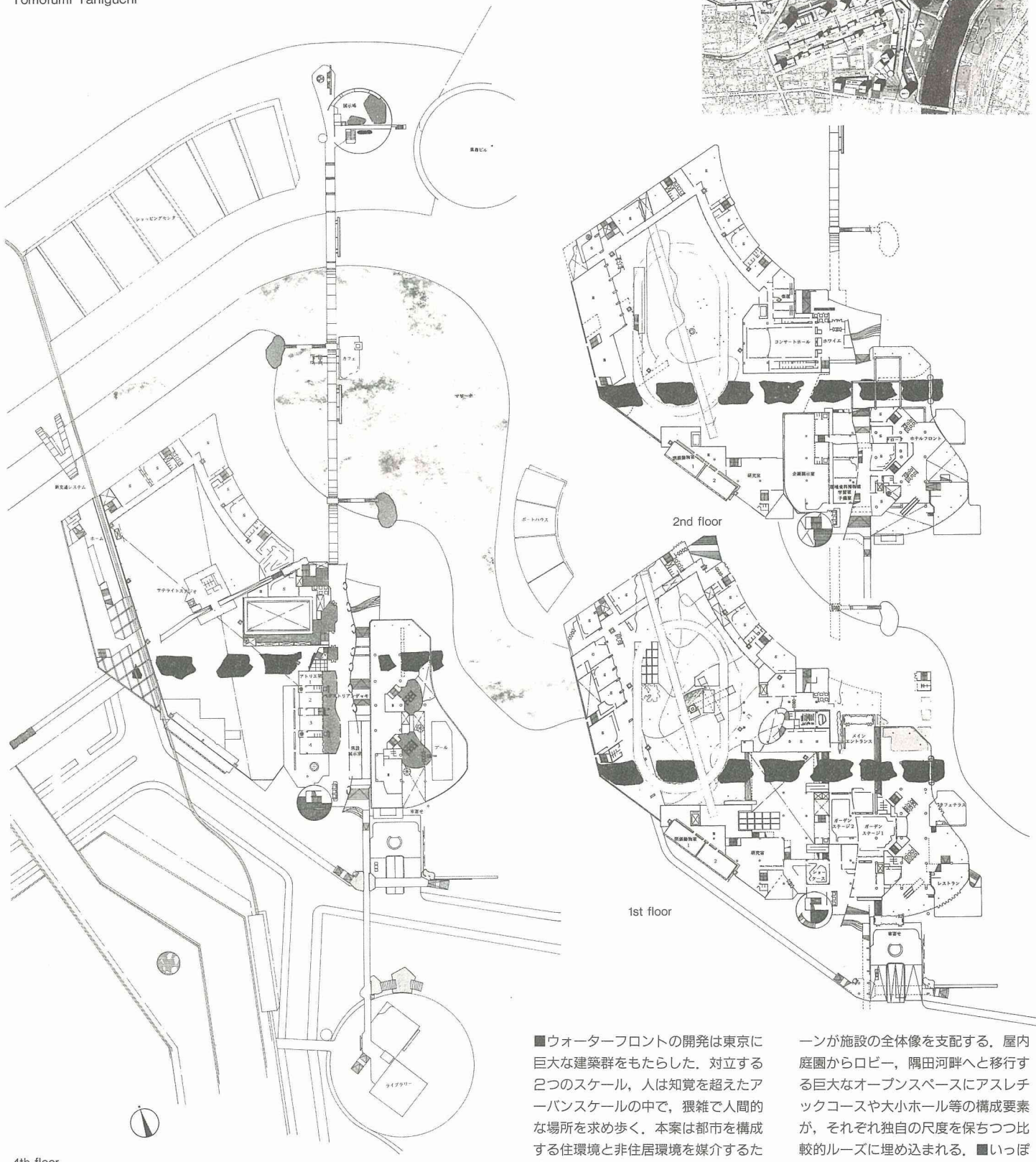
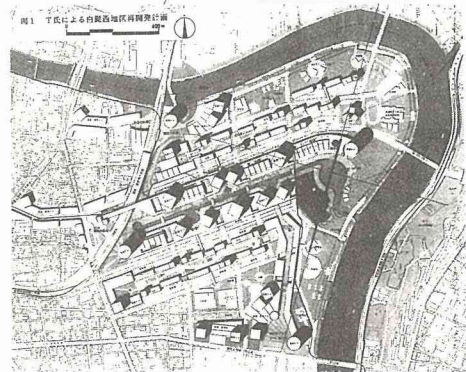
■東京北部を流れる石神井川では、近年その川沿いに親水公園等による人びとの憩いの場が生まれ、都市河川の水辺空間が公園空間となって街の中へと徐々に浸透してきている。■本計画では、石神井川流域王子地区にある音無親水公園とJR王子駅に挟まれた土地を利用し、水辺空間での活動を活発化させる提案を行った。この地域は明治初期、製紙産業が興された場所であり、現在は紙の博物館がその歴史を伝えているが、近年の首都高速道路新設により、取り壊しを余儀なくされている。■そこで設計では、新たに紙の博物館を計画地の水辺空間に建設し、かつての石神井川と紙の関係の伝承と、紙に関する資料収集の場の創設を図った。加えて、王子周辺地域の史跡、公園のネットワークの起点として情報提供を行う史跡訪問の拠点を設けた。そしてこれら施設を公園の一部として、連続した空間とすることで、互いの存在が、公園空間を多様で豊かなものとしていく提案を行った。

# リバーフロント・コンプレックス建築計画

Project for River-front Complex

卒業設計製図

谷口知史 (山下研究室)  
Tomofumi Taniguchi



■ウォーターフロントの開発は東京に巨大な建築群をもたらした。対する2つのスケール、人は知覚を超えたアーバンスケールの中で、猥雑で人間的な場所を求め歩く。本案は都市を構成する住環境と非住居環境を媒介するために、複合施設の構成にスケール的な自由度を与える試みである。■本案の背景は荒川区の「川の手新構想（丁建築設計研究所案）」である。文化・娯楽施設とホテルのための4万㎡の敷地が用意される。互いに補完的な2つのゾ

ーンが施設の全体像を支配する。屋内庭園からロビー、隅田河畔へと移行する巨大なオープンスペースにアスレチックコースや大小ホール等の構成要素が、それぞれ独自の尺度を保ちつつ比較的ルーズに埋め込まれる。■いっぽうその上部、文化施設とエントランス領域から成るゾーン（ブリッジ）には、コンサートホール、展示空間（環境博物館）と人びとの動線のための、厳密なスケールが与えられている。

4th floor

2nd floor

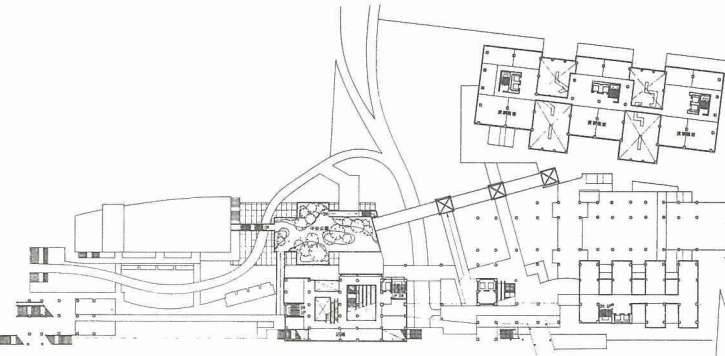
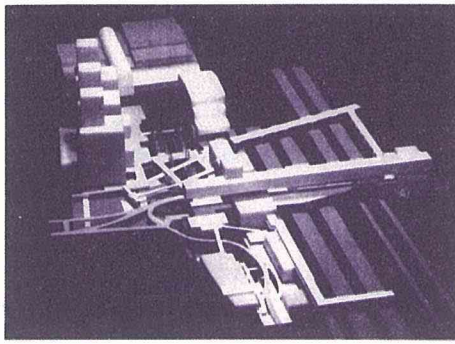
1st floor

# 北千住駅再生計画

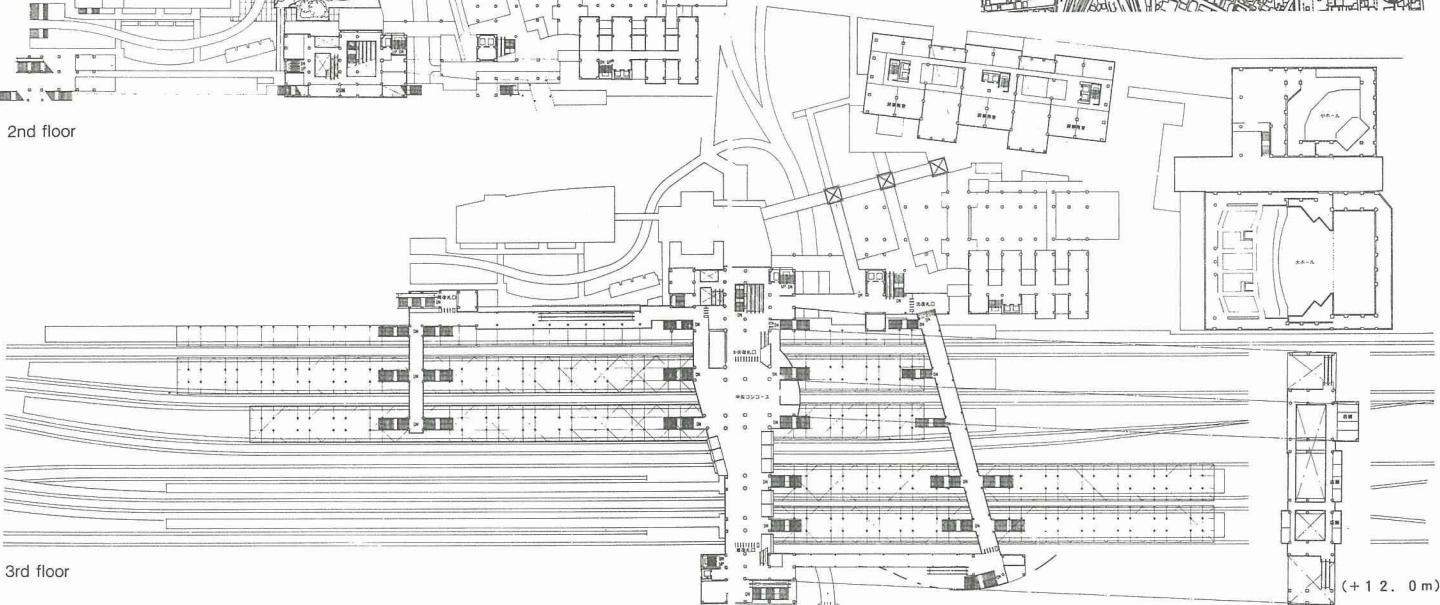
Project for Kitasenju Station Reconstruction

日下雄一郎 (志水研究室)  
Yūichirō Kusaka

卒業設計製図

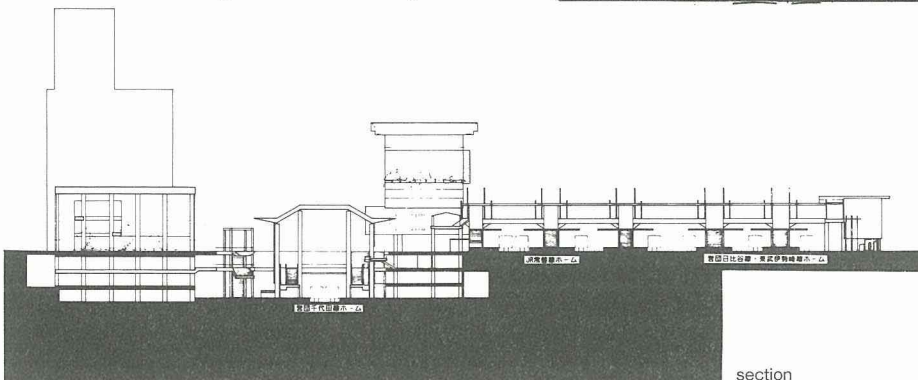
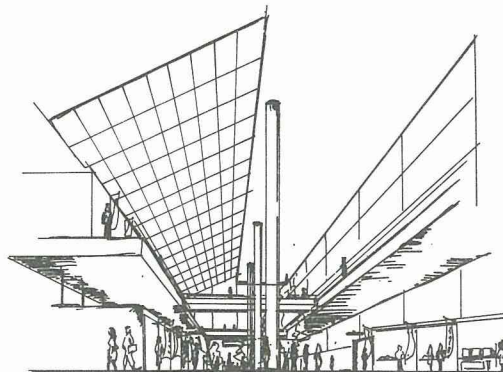
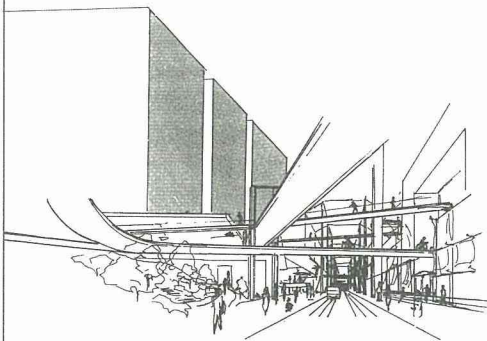


2nd floor



3rd floor

(+12.0 m)



section

■地下鉄の電車を降りると、記号や標識によって出口に誘導されるが、陰惨で退屈な空間となっている駅がほとんどである。多勢の乗降客に対し出口が少なく、階段幅が狭く、不便である。

■そこで、卒業論文を対象とした、営団地下鉄千代田線の駅のうち、最も乗降不便な北千住駅をとりあげ、さまざまな問題点を解決しつつ、今までにない地下鉄駅にするべく、①地下と地上の視覚的連結、②乗り換えの明確化、快適化、③快適な自転車および歩行者空間の提供の3点を柱に改善案を提案する。

■計画する上で特に①に重点をおき、千代田線のホームのレベルまで掘り下げ、G.L.レベルに南北方向とそれに垂直に交わる乗り換え方向にブリッジをとばすことにより、電車を降りたときに記号や標識に代わる新たな視覚的情報を与える。

■また、南北に長い敷地を5つのゾーンに分け、それぞれのゾーンにあった階段を設けることにより、今までの退屈な地下鉄出口の改善となることが期待できる。



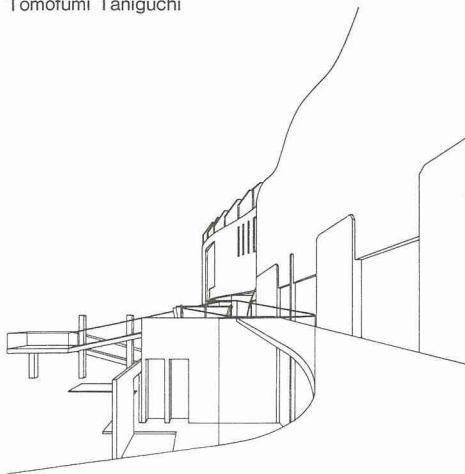
# 星田ふれあいクラブプロジェクト

Hoshida Community Club Project

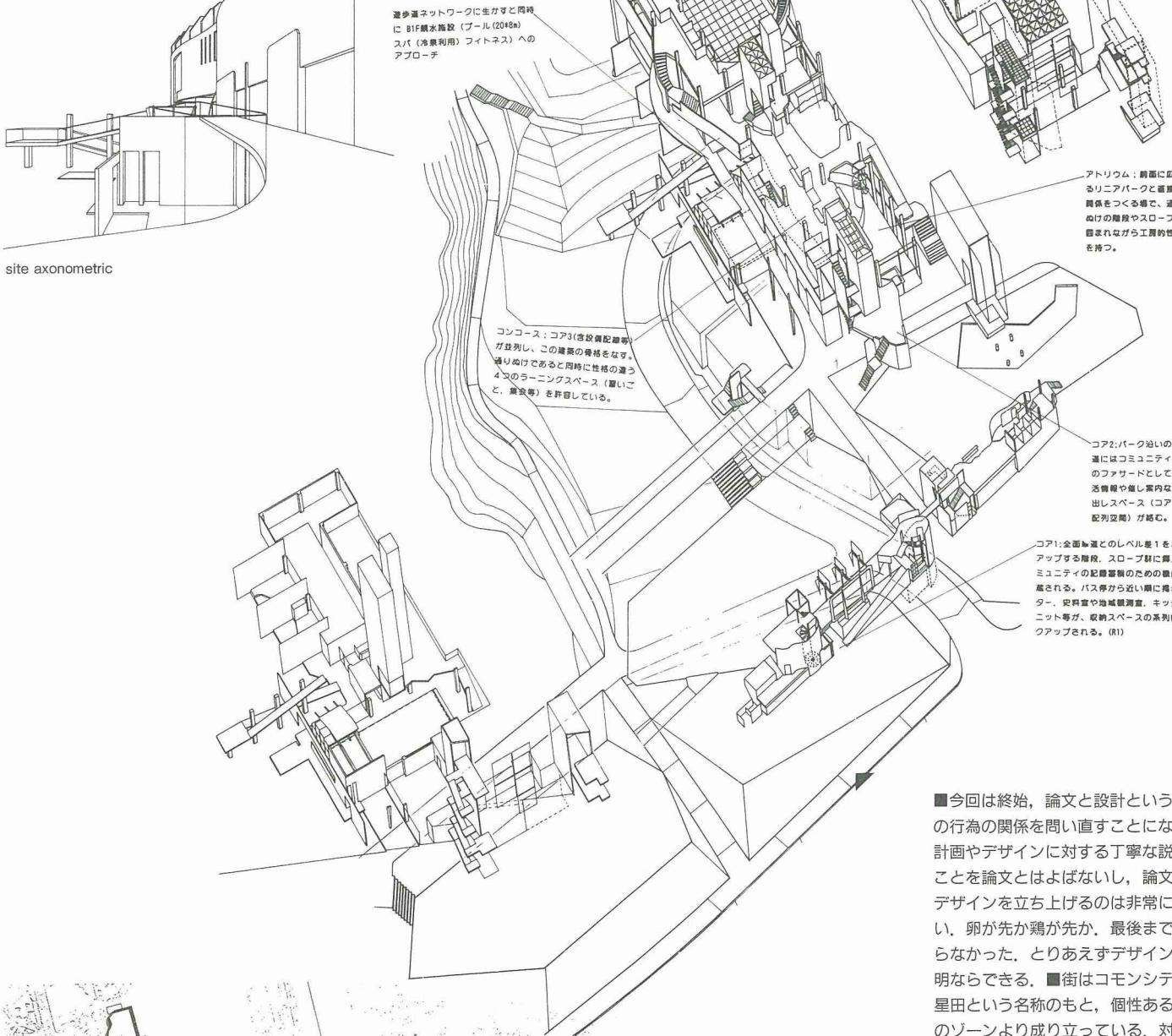
卒業論文(制作)

谷口知史(山下研究室)

Tomofumi Taniguchi



site axonometric



PIF:屋頂デッキ+カフェ+展示、このレベルで  
前の遊歩道ネットワークに接続

緑芝は前面パークとの対応  
下部はアトリエ用収納室

住民シアターは手動式可変床によるアダプタ  
ブルステージ。CATVや多目的音響が一系に原  
を構く。前面の階仕切りを払えばコンコ  
ースと一体化してパークへの方向性を得る。

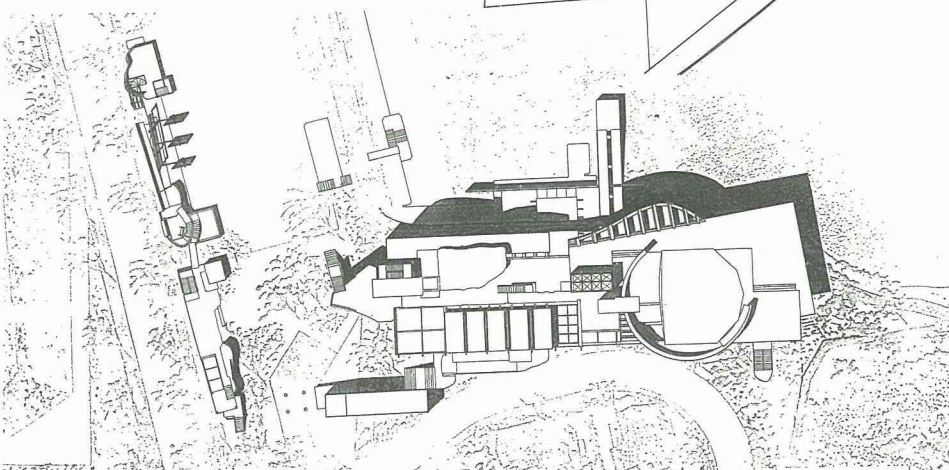
遊歩道ネットワークに生かすと同時に  
BIF観水施設(プール2048㎡)  
スパ(浴槽利用)フィットネスへの  
アプローチ

コンコース:コア3(倉庫前配廊等)  
が並列し、この建築の骨格をなす。  
通りぬけであると同時に性格の違う  
4つのラウンジスペース(若いこ  
と、集客等)を許容している。

アトリウム:前面に広がる  
リニアパークと建物の  
関係をつくる事で、通り  
ぬけの階段やスロープに  
囲まれながら工務的性格  
を持つ。

コア2:パーク沿いの幹線遊歩  
道にはコミュニティスペース  
のファサードとして、前の生  
活情報や催し案内などの小見  
出しスペース(コアと展示の  
配列空間)が並び、(R2)

コア1:全面緑道とのレベル差1をポンプ  
アップする階段、スロープ群に舞土やコ  
ミュニティの記録情報のための機能が埋  
込まれる。バス停から近い所に指示モニ  
ター、史料室や地域観測室、キッチン  
ユニット等が、収納スペースの系列にパ  
ックアップされる。(R1)



site plan

■今回は終始、論文と設計という2つの行為の関係を問い直すことになった。計画やデザインに対する丁寧な説明のことを論文とはよばないし、論文からデザインを立ち上げるのは非常に難しい。卵が先か鶏が先か。最後まで分らなかった。とりあえずデザインの説明ならできる。■街はコモンシティー星田という名称のもと、個性ある5つのゾーンより成り立っている。対立したデザインと複合した生活環境。そこでの伝統的かつ実験的な試み。コミュニティー(共同体)という意識からは分散しがちな若い世代のために、街の広場に1組の仕掛けを施す。広場の起伏とリニアな形態を利用しながら、エントランス(ファサード)のための領域と、空間的・視覚的なダム(建築物、ランドマーク)を組み合わせる。通りぬけのできる人通りのスペース(寺社の境内の構造を思い浮かべるとよい)を形成するためである。あとは、空間に対する自由な造形が展開されてゆく。

# 新しい建築博物館の提案

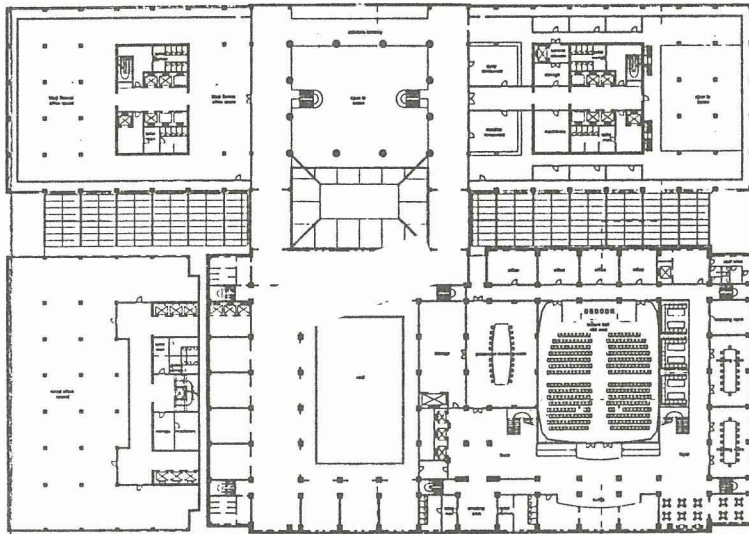
Proposal for an Architectural Museum

修士論文(制作)

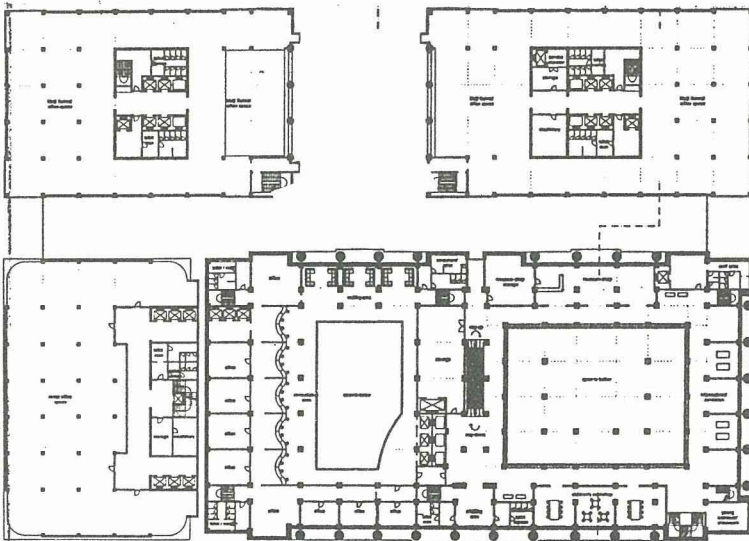
\* 1991年度大岡山建築賞受賞  
The O-okayama Architecture Prize

コヴァーチ・ベンツェ (藤岡研究室)

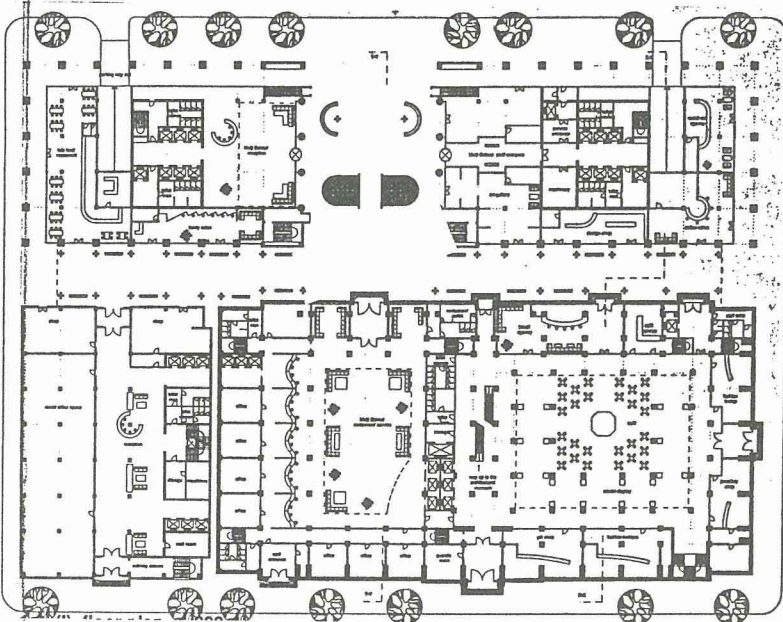
Kovacs Bence



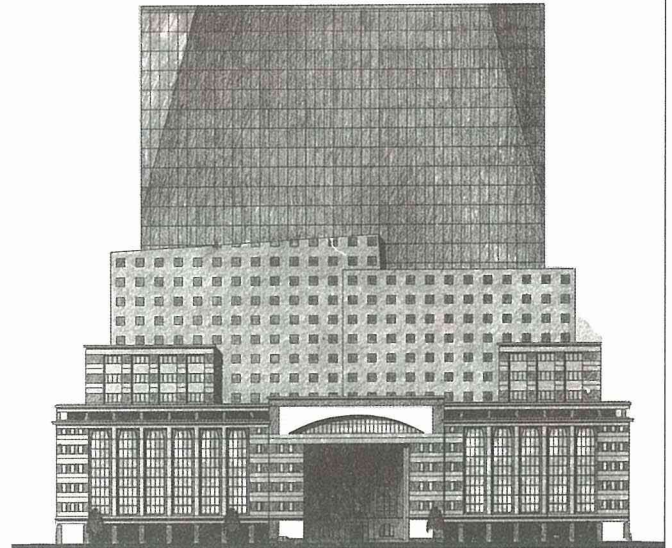
7th floor



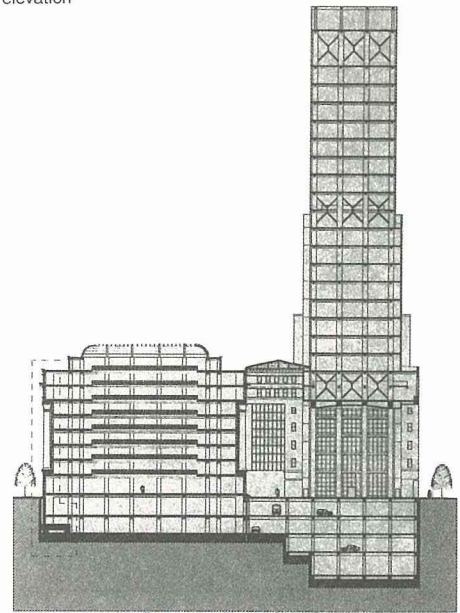
2nd floor



1st floor



west elevation



section

■日本初の建築博物館の提案のために、丸ノ内に位置する明治生命館（1934年竣工、岡田信一郎設計）を計画の対象に選んだ。その外壁と一部のインテリアを残して内部を改造し、あわせて同ブロックを再開発する。■そこでは東京都の歴史的景観保存事業の適用を受けることを想定し、容積率を25%増加させ、全体を計画した。その際、都市景観への配慮、明治生命館と超高層棟の関係に留意した。具体的には①皇居側の従来の高さ31mを尊重し、超高層棟は反対側に建てる。②新旧建物間に街路的雰囲気をもった通路を設け、明治生命館の大営業室とともに公開空地とする。③その部分のファサードに明治生命館西・南面のようなデザインを施す、などである。超高層建築の下部では新古典主義的なデザインを用い、上部では近代的デザインに変化させる。博物館には展示室、収蔵庫、情報センター、会議場などを配した。歴史的な建物の保存と活用を行ったので、建物自体も展示物になる。

TIT建築設計教育研究会の招聘により、客員研究員として来日したアンドレア・リアーズ氏に、日本の都市、建築について一文を寄せていただいた。氏のプロフィールはP6に掲載。

# 10年をふりかえって

A Ten-Year Perspective

アンドレア・リアーズ (AIA会員)

Andrea P. Leers, F.A.I.A.

また日本のこの10年の掛け値のない成果は、それ以前よりもしっかりとつくられた物理的環境です。おそらく世界一の建設水準や質や技術だと思われます。しかしそれは、主としてきらびやかでせいたくな、特別な建築や環境についてです。残念ながら、住宅・学校・職場といった日常生活の場では、受け入れがたい妥協的環境がそのままに残されています。この10年間に建築家は、日本の都市のユニークな姿をより良く理解し、明確にし、つくりだそうと試みました。混沌とし、骨格のない、そして変化の激しい街という概念に触発

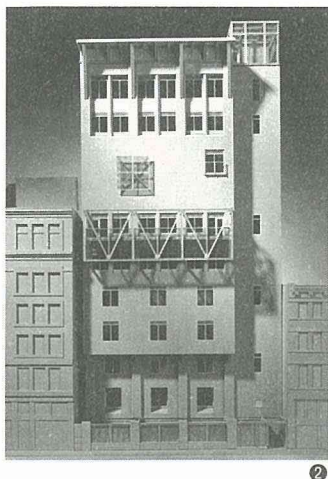
ち ようど10年前の2月、私は初めて東京に降り立ちました。そのときは、芸術振興の奨学資金を政府から得て、日米芸術デザイン交流計画研究員、東京大学客員研究員としてほぼ1年日本に滞在しました。そしてこの1982年以来、研究・設計・教育活動のために、少なくとも年に1回は日本に来ています。長く続いた物資の欠乏と人びとの自制的のみに生じた、ぜいたくなものへの欲望や、経済の繁栄による建物の爆発的な増加を、私は日本でこの10年間に見続けてきました。希望あふれた計画が新しい文化施設や娯楽施設をつくりだし、すばらしい建築的成果をもたらしています。たとえば、楨彦設計の東京都体育館、篠原一男の東京工業大学百年記念館をあげることができます。またこの期間に、とても独創的な複合商業施設が設計され建設されています。そのなかでも安藤忠雄の京都のタイムスは注目に値します。さらに、数多くの非凡な住宅がつくられています。伊東豊雄のシルバーハットは私の目に焼き付いて離れません。

されて、さまざまな建築の形、詩的なものやニヒルなものなどが生みだされました。しばしば街の混乱によって、コントロールが放棄されているようにみえます。しかしながら私のみるところ、日本の街は見た目には複雑で、物理的に密集し、確かに急速に変化していますが、そこにはかなりの秩序が認められます。これから先、日本の建築家はどのようにして彼らの才能を發揮していくのでしょうか。彼らは率先して、今の普段の生活の場に、すぐれたデザインを施さねばなりません。初期の近代建築家たちが良く理解していたように、芸術的課題と社会的課題との間には密接な関係があるのです。

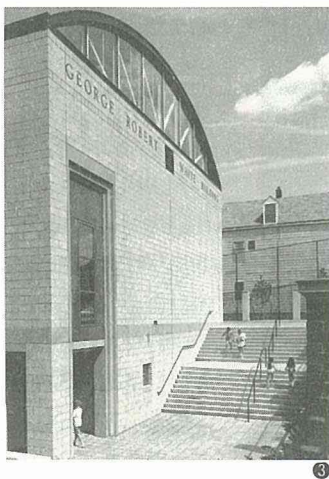
この社会の中で、筋の通った都市の理想像を探ることを、続けなければなりません。昔の都市の姿が壊されても混沌とした世界に退く必要はないし、むしろ都市のダイナミックな見方へ向かうべきです。地形・社会組織・発達したインフラといった都市の基盤となる構造を理解し、それを向上させることは可能です。都市の活気や変容は、カオスや無秩序と混同されるべきではありません。楨が語っているように「建築という行為の文化性を確かめるために」(JA 1991-1992年鑑)、国際的な水準で私たちは、意味のある意見交換に努め、それを持続しなければなりません。日本人の、学び、改善し、前向きな強い態度に、私は10年来感銘を受けてきました。同時に、伝統建築や現代建築にかかわらず、さまざまな着想の建築に感動し続けてきました。人が未来に挑戦しようとするとき、多くはひるみがちになりますが、私は楽観的です。私たちは互いに学び続けなければならぬと確信しています。(訳/前田折男)



①メイン州の休暇住宅 (1989)



②ボストン地下鉄コントロールセンター (1991)



③ジョージ・ロバート・ホワイト青少年センター (1991) ——リアーズ氏の作品より

# 学校環境と計画における新たな展開に向かって

A New Approach to the Study of School Environment and Planning

宮本文人 (文教施設総合研究センター・助教授)

Fumito Miyamoto, Research Center for Education Facilities, associate professor

建築計画の研究には、大きくみると、住宅、病院、学校等建物種別の研究と、人間工学や環境心理学等の建物種別を横断する研究がある。私自身の研究テーマはどうかといえば、次の3つの側面をもっていると思われる。

第1は建物種別でみると研究対象が学校建築であること、第2は横断的にみれば環境心理学的なアプローチであること、そして第3も横断的な面であるが研究を行う上で調査・分析方法を意識してきたということである。

第1の研究対象が学校建築であることは、私が文教施設総合研究センターに所属しているので、ある意味では当然といえるかもしれない。東工大に文教施設総合研究センターがあることを知らない人たちも多いと思われるので、紹介させていただくと、学校建築、公民館等の社会教育施設、博物館等の文化施設、スポーツ施設を総合的に研究するところである。

学校建築は、小学校、中学校、高等学校から大学まで教育段階に応じて設けられているし、大学にはいくつかの専門分野があり、さまざまな機能をもつ建物があるので、言葉からうける印象以上に研究範囲が広い。近年では大学・大学院の研究や教育から小・中・高等学校の教育まで見直しが行われており、特に、大学・大学院は大きく変わるであろうといわれている。今後、それに対応して学校建築も変革していくことが予想される。

第2次大戦が終わってから近年に至るまで学校建築は短期間で数多く建設しなければならない状況にあったので、ごく一部の学校を除きデザイン的に質の高い建物をつくる余裕がなかった。現在では経済的に豊かになったことや、いままでの反動もあり、よい建物をつくらうとする動きが活発になっている。

学校建築は一見地味な建物なので、私自身も学生時代にはどちらかといえばあまり興味をもっていなかった。しかし、学校建築は勉強してみると、教育問題などが絡んでいて奥行きがある。また、たとえば、小学校の実際の計画では学校の先生や役所の人たちとのやりとりから平面が決まってくる。その時悔し

い思いをすることもあるが、自分のもっている考えや知識を活用できた時は実に楽しい思いができる。これからは建築デザインの側面も含めて、学校建築はもっといろいろな意味で面白く、華やかになっていくと思っている。

第2の側面としてあげた環境心理学は欧米で1970年前後に心理学、地理学、建築学等の研究者が集まって成立した。建築学の中では環境心理は環境工学の分野で盛んであるが、内容的にはむしろ建築計画の方に近い。正確に調べたわけではないが、建築計画とよばれる研究のうち半数近くは環境心理学の研究といえるのではないかと密かに思っている。環境心理学とは文字どおり環境と人間との関わりを研究する分野なのでかなり範囲が広い。しかし、建築学に環境心理学を導入した人たちの専門から、環境心理学は知覚、イメージを研究する分野であるという狭い認識をもっている人が多く、残念である。環境心理学は学校建築においても重要であるので、建築学の中でもさらに発展するよう努めたいと思っている。

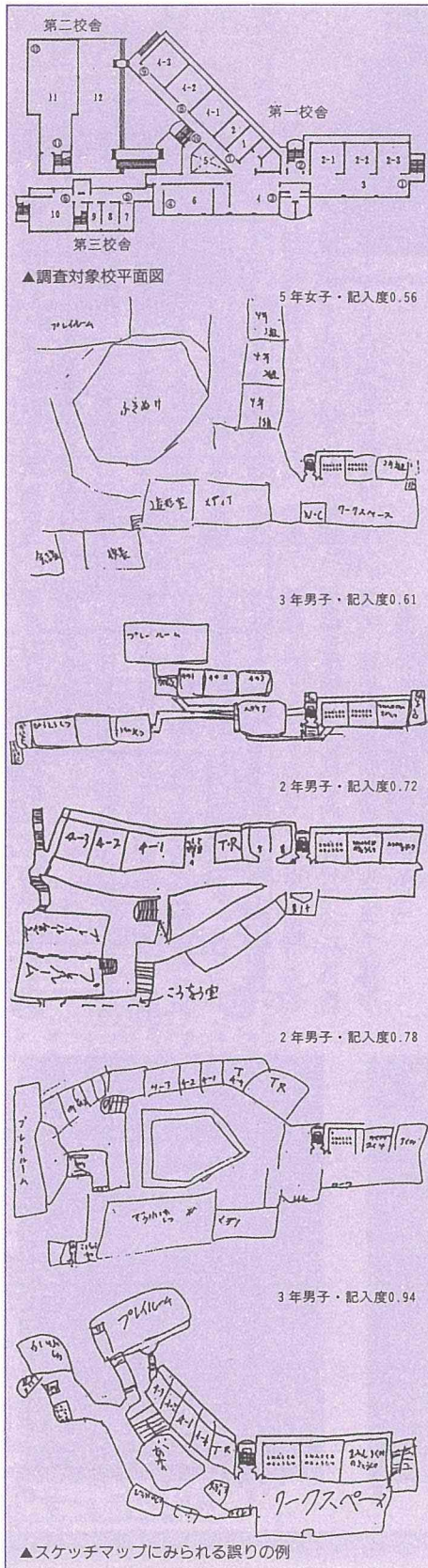
第3の側面として調査・分析方法をあげたが、最近特に興味をもっているのは、科学におけるパラダイム論と結び付けられながら発展してきた認知論的な考え方である。かつて、心理学をはじめ行動に関わる科学を支配していた考え方は行動主義であった。現在では行動主義は衰退し、認知論的な考え方が新しい潮流を形成しているといわれている。

行動主義の考え方とは、科学的研究では人間の観察できる反応、特に行動に焦点を合わせるべきで、環境が刺激として何よりも決定的であるというものである。そこでは、観察できない思考等の心理的過程は直接扱うべきではないとされていた。

いっぽう、認知論的な考え方では科学は社会的に組織された知識の獲得過程とみなす。したがって、心の中の認知過程が研究の対象とされる。この考え方は哲学、心理学、人工知能、言語学、人類学等で大きな影響を及ぼした。

建築計画が建築学会で発展してきた時期は行動主義の時代と重なる。建築計画の研究も発展の過程において行動主義的な考え方の影響を受けたと思われる。しかし、今後は、建築計画の分野にも認知論的な考え方が影響を及ぼし、それに基づいて開発された研究方法が大いに取り入れられるものと信じている。

以上、私の研究テーマを位置づけてみた。これからも、上述した3つの枠組みの中に閉じ込めるのではなく、理想であるがそれらを軸に研究を展開できればと考えている。



## 空腹の時代から

After a Period of Hunger

中島 隆 (1951年卒・鹿島建設専務取締役)

Takashi Nakajima, KAJIMA Corp.(Eng. '51)



谷口先生との図面打ち合わせ

（かみ）  
床

や焦土の金庫吹き鳴らす

俳人、加藤楸邨の終戦直後の作である。この時代の風景をこれほど率直に表わしているものはないと言われている。私はこの少し後、九州から旧制佐賀高等学校を経て、上京している。東京はどこからも富士山が望めるほどの焼け野原であった。

東工大正門横の風洞実験施設も爆撃の残骸を曝していたように思う。

そんな学生生活では「腹を満たすこと」が最大の関心事であった。

もともと、この飢餓感には食べ物に対すると同様に、知識についても強烈であったことがせめてもの救いだったかもしれない。

戦前でも地方の高等学校には東京から来た優れた学者や数少ないが外国の語学教授がいたりして、私たちに未知の世界のこと、欧州の知識や風物について眼を開いてくれたものである。いっぽうにおいてミリタリズムの風は激しくなるばかりであった。

そして敗戦。私にはこれからいよいよ自由知識を習得できる時代、大学はその夢を叶えてくれるものと希望に燃えての入学である。しかし生活の基本的条件である衣食住が満たされないということは、この荒廃した都会では地方出の学生には厳しいものであった。

先生方もこんななかで、建築のデザインを教えることは大変だったに違いない。何といっても実作が少ない。瓦礫を整理し人びとは住む所を探すが、精一杯の状態である。

そんな時代でも、やはり眼を開かれたのは谷口吉郎先生の「藤村記念堂」や「慶応の校舎」学生ホールや万来舎の設計であった。

幸いにも私は先輩の勧めにより慶応の塾監

局という所でこれ等の仕事のごく一部を手伝う好機に恵まれた。

当時、猪熊弦一郎、イサムノグチなど芸術家と谷口先生のやりとりを近くで見ることができたことは貴重な体験であった。

まだデザインについての情報誌など乏しく『新建築』など数ページではなかったろうか。

私にとって教室の先生の講義より著作や研究室でのお話の方がはるかに印象が強かった。もともと仕事上の先生はこわかったが。

卒業後30年経って仕事の関係で当時の東ベルリンを訪ね、先生のシンケルについての『雪あかり日記』を辿りながら、終日歩き廻ったことも良い思い出となっている。

また、今は政治情勢が不安定のようなのであるが、あのカンボジアのアンコール・ワットも訪れてみたい。藤岡通夫先生のこの遺跡に対する思い入れが今でも耳に残っている。

谷口先生の所には私はむしろ卒業してからの方が長くなって、通算約7年、「秩父セメント」から「吉川英治記念館」までずっと教えをいただき、先生の図面の表現手法や詳細の考え方、材料を選択される時の真剣な眼、ずいぶん勉強になった。師弟関係の口伝のようなことがいかに大切であるかをこの時知ることになる。

私の大学生活はいつまでも終りがなかったような、そしてあの物心両面の飢餓感がだんだん満たされていった思いがある。建築を学ぶには長い時間と実作が必要なこととも教えられた。

設計など志すには、できることなら豊かであるに越したことはないと思つた。

歴史が示すように優れた建築は豊かな社会環境と高い才能の遭遇によって生まれること

が多い。現代はかなりそれが満たされる豊饒の時代となった。

しかし容易に手に入るものは、失うことも早いことを心すべきであろう。

空腹の時代に生きた者の、豊かな時代での自戒の言葉である。

表紙の作品は、私のところの北典夫君（1981卒）「お茶の水駅コンペ案」（佳作入選をに使わせていただいた。

中島 隆 Takashi Nakajima

1927年 福岡県生まれ。旧制佐賀高等学校を経て、  
1951年 東京工業大学工学部建築学科卒業、  
1991年 鹿島建設専務取締役、設計・エンジニアリング総事業本部長、カ  
ジマ・デザイン・ヨーロッパ社長、アルモ設計社長等、  
建築審議会専門委員、建築業協会設計部会長を歴任。日本建築学会理事、  
東京建築士会理事、TIT建築設計教育研究会運営委員長など。



## 天与の才能と 環境育成

Genius and Educational Environment

建築環境工学 Environmental Science & Technology

紀谷文樹(教授)

Fumitoshi Kiya, professor

高校に入って陸上競技で走っていた頃に、100mを11秒台で走るところまでは誰でも練習でいけるが、11秒を切るのは才能がなければだめだということを、先輩から聞かされたことがある。鈍才の私は12秒を一回切っただけであった。

設計というものも、同様に才能に左右されるものであろう。意匠設計だけでなく、構造や設備の設計もその様に考えられる。それらを総合する力は天与の才能と言わなければな



らない。バルセロナの聖家族教会の構想を聞くと、まさに壮大かつ緻密な計画で、ガウディの才能の偉大さを示す空間構成であると考えられる。

いっぼう、良い環境に遭遇し、良い経験をもつということも大切である。学生時代に、谷口吉郎先生の製図の講評は、いつも階級の納まりができていないかということばかりで、初めはなぜこのような大先生がこのようなことにこだわるのかと不思議に思ったものであったが結果は、空間の理解をたたきこまれていた。

武蔵工業大学時代に、設備設計演習の授業を担当していたが、前の学期の建築設計製図の課題を使って設備設計をさせると、多くの学生が建築の設計変更を申し出てくるのが常であった。これは、何事も経験してみないとなかなか理解できないということの証であるだろう。設計の教育は、良い環境を用意して、まず経験を積ませることから始まるものと考えている。

## 設計とは自分のすべてで 勝負する

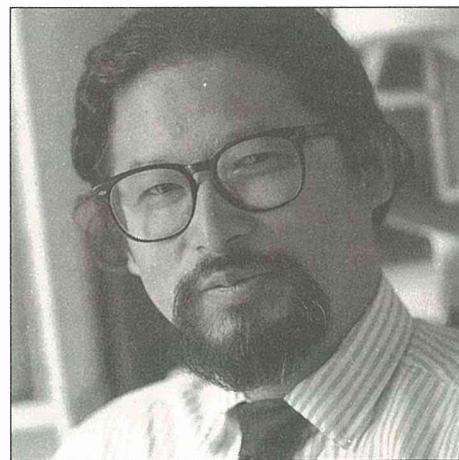
Design Is Giving It Everything You've Got

建築設計基礎 Basic Architectural Design

仙田 満(教授)

Mitsuru Senda, professor

設計という仕事は、そこに生活しそれを生活の基盤とする人びとのさまざまな営み（もちろん経済的なものも含む）を左右する非常に重要な仕事である。またある時はそこに生活することも達し大人になっても影響を与えつづける原風景をつくってしまう。その責任は重い。設計とはコピーでもないし、まして形のお遊びでもない。彫刻家や画家のように自分の金で作品をつくり、それを買ってもらうものではない。依頼者の金によって自分の作



品をつくってしまうことができるのだ。しかもそれは社会的な存在である。駄目だからといって簡単になくなるものではない。だから設計とは自分のすべてで勝負するものである。

いっぼう、設計という仕事を通じて——知力、友情、協調性、おもいやり、楽しむ心、積極性、挑戦性、想像力、体力等々を総合的に磨くことができる。学生時代の設計演習でもその気構えが重要である。

私自身の大学時代での思い出は当時助手であった内藤昌先生にとにかく大学で図面を描けといわれ、同級生のみんなといろいろと徹夜をし、議論をし、教え、教えられたりしたことだ。設計のおもしろさ、楽しさを十分に体験した。協同して友情をはぐくみながら仕事をやる楽しさを大学で学んだ。

私は大学をでて4年で独立して、建築家として活動をはじめてしまったが、学生時代に設計の演習で学んだ協調性と挑戦性は私の設計の基本的な態度になっている。

設計の難しさ、社会的責任、楽しさ、そして素晴らしさを伝えたい。

# アメリカで学んだ 教え方

Teaching Methods Learned in the U.S.A

建築設計 Architectural Design

茶谷正洋 (教授)

Masahiro Chatani, professor

15年前、シアトルのワシントン州立大学客員になって15人のデザインクラスを担当した。まだ若かったので、他の先生方から教え方を習いに行くのだといわれた。学生の車に乗って、郊外のベルヴィューという湖畔の住宅地を訪ね、芸術家村をプレファブで設計する課題にした。

毎週2回、歯医者予約のように1人ずつの案に朱を入れた。日曜の夜更けも、製図室に行きつて励ました。



もうひとつの授業は、日本からもっていった民家のスライドを見せるのと、墨流しやアイデアル・トイレなどの習作を求めた。ケント紙が日本独特の紙であるということを知った。

シアトルの人びとは、ヨーロッパから遠いので、FAR-WESTという心境もあって、日本への親近感が強い。環太平洋文化圏がもっと親密になれば、日本を次のFAR-WESTにしたいように思えた。

最後に学生の作品展をした時、タイトルにProf. Chatani's Slavesとあった。

建築学科のあるデザイン学部のグールドホールは、中央が吹き抜けで市民参加の催し物もあったり、バスケットボールのコートにもなるが、いつもは学生アルバイトによる喫茶店で、先生と学生の茶の間になっていた。

アメリカ北部だからニート（清潔）で、アグレッシブ（積極的）だ。学生との面会時間をお昼休みに限ったので、授業のない時は乗馬と水上飛行機に通った。採点の時、みんな「満点にするな」と釘をさされ、南米に向かった。

# 変化する時代における 教育

Education in a Changing Age

文教施設総合研究センター

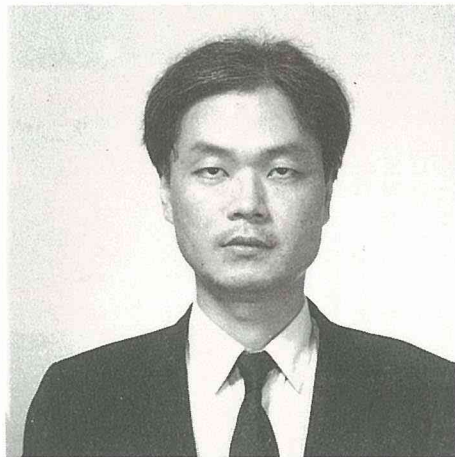
Research Center for Educational Facilities

宮本文人 (助教授)

Fumihito Miyamoto, associate professor

とかく教育と名前がつくものは難しいものである。設計教育も例外ではない。教育の効果は長期的にみなければ評価できないし、教育がおろそかになると気がついた時にはとり返しのつかないことになっている。優秀な指導者がいれば短期的には何らかの形で効果は上がる。しかし、それが長期的に評価できる効果であるか否かはすぐには判断できない。

また、評価の仕方は大きくみればその時代を支配する考え方によって異なる。たとえば、



時代を支配する学問の考え方が本当の意味で大きく変われば、極端な見方をすれば、一流の学者もただの人になる可能性がある。このことは建築設計の分野においてもあてはまる。私の学生時代は近代建築が万能ではなくなり、設計に対するさまざまな考え方が現れてきた時代であった。そして、今も設計に対する考え方は多様で、動いているように思われる。

現在のように、世の中自体が動いている時代はある意味では非常に面白いが、大学での教育はいつそう難しくなる。建築設計の場合、技術的な知識についての教育は大前提であるが、単に知識のみを教えるてはならないと思う。教育ではアメリカの大学流に文献や物事の調べ方や見方、正確な概念の捉え方、論理的な考え方をしっかり学生に伝えなければいけない。そして、何よりも学生が議論を通して、考え方を選択したり、確認できる場を提供したいと考えている。私は実務に携わっている建築家ではないのでこのように考えるのかもしれない。

# 思考と実体験の バランスを大切に

Keeping a Balance between Concept & Reality

建築設計基礎 Basic Architectural Design

八木幸二 (助教授)

Kōji Yagi, associate professor

昨年度まで図学を教えていてこの4月から建築学科へもどり、建築設計の基礎教育に加わるようになりましたが、以前やはり図学から建築へ移られた篠原一男先生（百周年記念館の設計者）の言葉を思い出します。

図学の問題には正しい解き方と答があるが、建築の設計では唯一の正解がある訳ではないし、ましてや皆が自分ようになっては困ると思うと教えるににくいという主旨でした。

正解がないとはいえ、何をしてもよいので



はなく、満足していなければならない基本事項がたくさんあります。設計というのは総合化ですから、いわゆる設計・計画の原論だけでなく、歴史が教えてくれる必然性や、構造、材料、環境などの基本的知識が必要です。同時に大切なことは、日頃から良い建築環境に身を置くように心がけ、その設計理念を考察するとともに、空間のスケールやディテールを実体験することです。

設計課題では、そうした知識や実体験をもとに、自分なりの理念を構築し、リアリティーのある答を導きだすのです。幸い最近の設計教育には、計画系の先生の他に、構造など他の分野の先生や非常勤講師の先生が参加されるシステムになっているので「皆が自分ようになる」心配は減っています。

いずれにしても唯一の正解があるわけではないのですから、学生諸君は、与えられる知識だけでなく、実体験から得た疑問を諸先生にぶつけ、正解と誤解の間の振幅を見極めるべきです。

学生時代の話をお聞かせください。

工藤 あまり勉強した記憶がない、3回以上出た科目は出席をとられる化学実験と体育ぐらいではないだろうか。製図も締切が終わってから始めるのが常で、とにかく学園紛争まではすべて大らかで、大学も学生の将来に期待をかけてくれて、あまり細かなことは言わなかった。今は手とり足とりしなければならぬから学生も学校側も大変でしょう。鮮明な記憶は演劇部と卒計です。演劇部は、いつも僕の製図を一手に引き受けて、かわりに僕がパースを描くというギブ・アンド・テイクの関係だった桂川君（桂川潤一郎、現・日建設計技術長）への恩返し（パースだけでは足りないの）のつもりで演劇部の舞台の色塗りを始めたのがきっかけで、演出までやることになり、60年安保のさなか、抵抗の作家ジャン・アヌイの『アンチゴネー』をやった。

ほとんど教室には出ず、製図も出さずという状態で、それでも出していただいたのは、よき時代のよき先生方の読みの深さと感謝している。

卒計については、『新建築』（1991年2月号）に書いたから読んでもらえばいいのだが、要するに実態のある「建築」がきらいで身の毛もよだつ感じだったので、絶対に建築でない建築をつくらうと思った。留年覚悟だったのが、構造の大御所で当時主任だった加藤六美先生が最高点をくれたので、卒業するハメになったという記憶。やっぱりものを見る目のある先生は御自身偉くなった。（笑）

カーンとのめぐり会いについて話してください。

工藤 カーンのところに行きたいきさつ

## 工藤国雄さん(1970年卒)を訪ねて

Visiting Mr. Kunio Kudo

### 先輩、元気ですか④

Talks with Well-known Alumni

は、『私のルイス・カーン』（鹿島出版）を読んでくれれば分かりますが、かなりの偶然です。また、カーンの思想とかやり方については『ルイス・カーン論』（彰国社）、その会話体『講座：ルイス・カーン』（明言社）を読んでください。短く言うには長すぎる話ですが、とにかく僕の人生では棚からポタモチのように不意にやってきた財産でした。

それはどういう「財産」だったのですか？

工藤 つまり「建築とは何か？」ということ、「デザインとは何か？」ということについて教えられたということです。それは簡単に言えば「真実を開き示す」ということだったと思うんです。でも建築で真実なんてことを口にする人はもういないし、真実とか実存というものを感じることができる人間がもういないから、やたら皆うまくはなるけれど、ドスンとかジーンとくるものがないんだ。実際につくってみると、施主はいるし、自分の「脳」力の限界はあるして、なかなかうまくいかないんだが、一番大切なのは、自分の脳ミソの限界まで自分が捉えている



工藤国雄

北海道生まれ、満州に育つ  
1963年東京工業大学建築学科卒業後、大学院修士・博士課程修了。  
1969～70年ペンシルベニア大学地域科学科研究員、1970～71年ルイス・カーン事務所勤務。72年帰国し、名古屋工業大学助教授に就任。その間、ハーバード大学、ブラウン大学で研究活動。  
1981年ニューヨークで設計活動。  
1984年からコロンビア大学で教える。  
現在、同大学日本建築研究本部副所長。

自分が捉えている「実在」を開ききることが大切だ。

最近の仕事の話をお聞かせください。

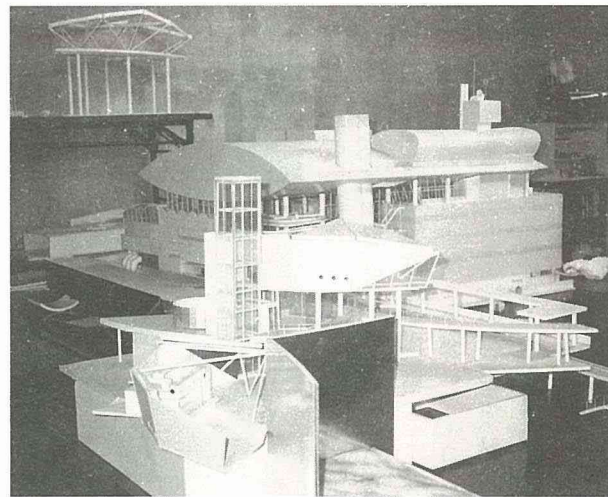
桑原 多摩ニュータウンの永山駅前、健康ランドを中心とした複合施設を建設中で、現在これにかりつきりです。かなり前から携わってまして、今年の12月にオープンなので、やっと解放されます。

その複合施設は、どんな内容なのか。

桑原 けっこう複雑な複合施設でして、サウナやジャクジーバスのある健康ランド、ボーリング場、遊戯場、飲食店などの店舗などが入る予定です。流行りすたりのある内容なので、設計段階でもかなり変更があり、今でも決まらない所があるくらいです。

なぜ就職先としてアトリエをお選びになったのですか。

桑原 はっきり言ってゼネコンには行きたくなかったんですよ。あんまり大きい所だと、規制されることが多いんじゃないかと思って、最初から最後まで現場を含めて携わることのできる小さい事務所の方がいいな、と思ったからです。この



永山アミューズメントコンプレックス(仮称)模型

アトリエに入るには苦労しましたよ。僕が4年生のとき、なかなか伊東さんのところからいい返事がもらえず、他の就職先を考えていたわけでもなく、研究生として学校に残るか、どうするかと、考えていたところ、やっと12月に返事がもらえたんです。

では、事務所の様子はどのようなものですか。

桑原 現在、事務所は20人ぐらいいまして、そのうちの8人がこの現場に携わっています。なぜか東工大出身者が多くて、僕を含めて4人います。今年も1人入りますしね。仕事の担当は、タイミングで決まります。ひとつの建物を、最初から最後まで担当するのが原則ですから、ちょうど現場の終わった人が新しいプロジェクトを担当する、といった形です。

伊東先生の印象は？

桑原 とにかく柔軟な人です。常に何かを見つけようとし、同じようなスタイルで続けるといったことはやりたがらないですね。

学生時代についてお聞かせください。

桑原 僕が3年の時、ちょうど篠原先生が建築学科にもどってこられて、積極的に、当時活躍していた建築家を講師として招いてくれました。その中に伊東さんがいて、熱心に指導してくれました。結局は、それがきっかけでこの事務所に入ろうと思ったのですが…

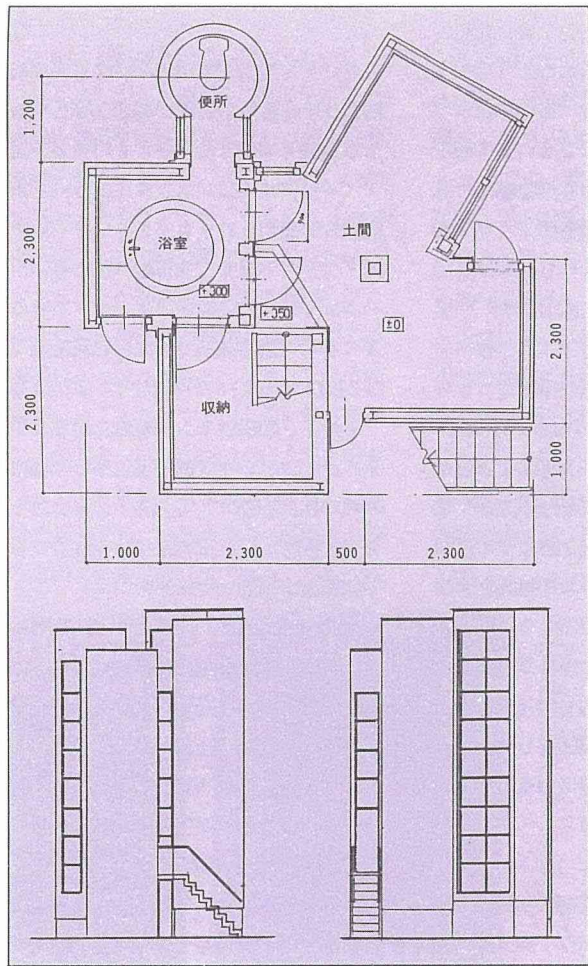
今の学生に対して一言お願いします。

桑原 一般の学生はわからないけど、うちに来る人はよくやってくれてます。けっこう勉強していると思います。やはり学生時代の方が自由な時間が多いので、大学内だけでなく外に目を向けてその時

実存を開ききることだと思うんだ。話は飛ぶんだが、最近といっても、2・3年前、吉本ばなの『キッチン』読んで、この子は真実といい関係もってるなと感じたんだ。涙がでちゃった。そんな建築が作りたいたいと思うの。そういうことを教えてくれるのがカーンだった。メチャクチャな人だったけどね。

最後に、学生時代には何をすべきかということについて助言してください。

工藤 まず勉強しないこと。大学で勉強したらロクなことにならない。大学は先生が勉強するところで、生徒が勉強するところではない。少なくとも日本では明治以来そうっていない。大学は空気を吸うところ。余力は学外に友達を作ることに向けること。将来の施主になる人間をたくさん友達にすること。特に、東工大は右を見ても左を見ても技術者ばかりで、社長になれる人はまれ。ましてや同じ学科の中では将来の競争相手ばかり。デザインの勉強で学生時代にしておいたらいいこととか、おこななければならないこととなると、まずそんなものはないと思った方がいい。ひょっとすると安藤のようにボクシングとか、カーンのようにレスリングとか、とにかくシビアな格闘技をやっていた方がいいのではないかな？ マージャンとか碁とかも社会出てからゲームの要素として役に立つかも。とにかく徹底して遊んでおいた方がいい。受験で鍛えられて基礎学力は十分あるんだから、人生それ以上必要はない。建築なんて技術とすれば簡単なものだ。日本の大学の4年は一種の社会的プロセス、一種の執行猶予期間と考えて、好きなこと



「住宅」1階平面・立面図

をたくさんしておくこと。悪いこともたくさんやっておくこと。好きなことも、悪いことも社会に出たらもうやれないんだから。そうやって自分を人間として大きく深みのあるものにしておくこと。本なぞ読まないでいいから、何か、人生のパターンになるような極端なことを徹底的にやっておくべきだ。

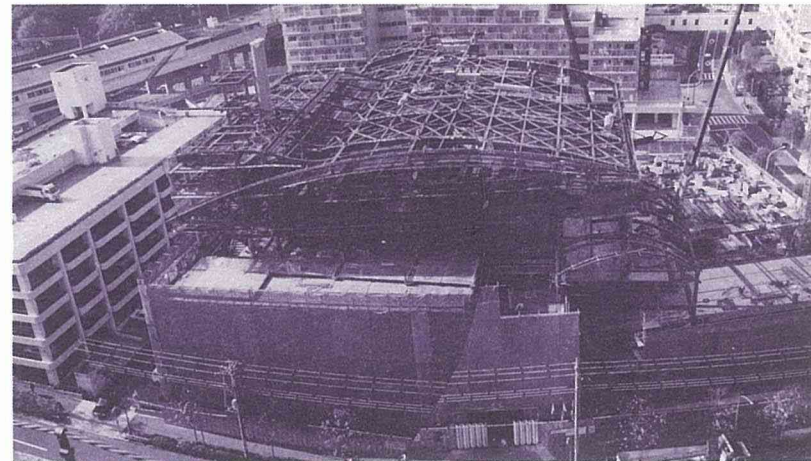
インタビューー：谷口知史・柴田哲司・関尾英隆(建築学科3・4年生)  
interviewers: Tomofumi Taniguchi, Tetsushi Shibata, Hidetaka Sekio

外に目を向けて時間を有効につかってほしい。

間を有効に使うようにした方がいいと思う。就職してから特にそう思いました。

今後やってみたいことはありますか。  
桑原 いろいろあるけどとにかく今はこ

の現場を早く完成させること。これが終わらないことには何もできなくて……。先のことはそれから考えます。



工事中の永山アミューズメントコンプレックス(仮称)

#### 桑原立郎

1959年東京生まれ

1983年東京工業大学建築学科卒業

1983年伊東豊雄建築設計事務所入社、

現在に至る。

主な仕事：大鰐スポーツコンプレックス(計画)、横浜博協会施設、永山アミューズメントコンプレックス(仮称)

#### 先輩、元気ですか④

Talks with Well-known Alumni

## 桑原立郎さん(1983年卒)を オフィスに訪ねて

Visiting Mr. Tatsurō Kuwahara in his Office



●1990年9月10日アムステルダム到着。市内に車で入る。空がようやく白み始め、朝もやのなかからぼんやりと赤黒い煉瓦造りの壁が浮き上がってくる。重厚な感じのする4層位の建物が道路を挟んでそびえ立ち、まるで鋭利なナイフで切りとったかのように統一されたスカイラインがヨーロッパの伝統を誇っているかのようだった。街全体を覆っている空気が日本とはまるで違う。非常に理路整然としていて、何かある秩序によって街全体が統合されているといった感じだ。これが私がアムステルダムの市内に入ってきたときに受けた第一印象であった。このアムステルダムという街は19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて建築家H.P.ベルラーヘによって大まかな都市計画が行われ、その計画に沿って道路や集合住宅が市内に配置されている。彼による1903年に建てられた証券取引所は著名であるが、今や多目的なホールとして人びとに利用され、ふつふつとアムステルダムの街に息づいている。彼の名は今世紀の初頭にオランダの建築を世に知らしめた、いわばオランダ建築界の父とも言うべき存在として建築家や建築の学生ばかりでなく市民にも親しまれている。

●私が留学したBerlage Institute of Amsterdamはこのベルラーヘから名前を採ったもので、基本的には2年間の設計プログラムを修了するという方針でヘルマン・ヘルツベルガー（以後ヘルマン）という舌がもつれそうな名前のオランダ人建築家によって設立された設計を主体とした建築学校のようなものである。私たちはその一期生であり、ディスカッ

## 海外体験記——4

Personal Experiences Abroad

# ベルラーヘ・インスティテュートでの1年

A year at the Berlage Institute of Amsterdam

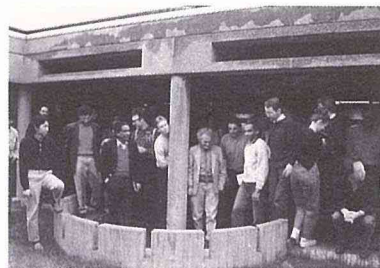
柳沢 潤 (伊東豊雄建築設計事務所、'92年大学院修士課程修了)

Jun Yanagisawa

ョンやプレゼンテーションを通して自分たちの建築に対する認識をあらためていこうという発想のもとに世界各地から16人の建築家(一度事務所を辞めた人たち)および学生が集まった。1年のカリキュラムは3ターム構成になっていて9月から12月、1月から3月、4月から7月という具合である。当初の予定ではこの1タームごとに大きな設計課題が2つ、Master Classという2週間での小課題が1つ、これには海外から建築家を招待し、さらに外からも参加者を20人位集い、ともにスタディを行う。この期間はBerlage以外からも学生を集め40人位のスタジオになるので学生間でも結構盛り上がる。最初のタームのMaster Classに招待された建築家は日本から安藤忠雄、オランダからウィル・アレツツというAAスクール出身の若い建築家、さらにカール・ヴィザーというヨーロッパでは著名な彫刻家、ヘルマンおまけにアルド・ヴァン・アイクというチームテンの生き残りまでやってきて最後のJURY(講評会)は何やらとりとめのめないものになってしまった。

●ひとつの課題が終わると必ずJURYが開かれるが、だいたい一人あたり説明時間が10分と制限されており、また質疑応答も7分くらいでこれから核心的な議論に入っていくという段階で中断してしまうことが多いのがこの学校の最大の特徴というか問題である。これから面白くなるぞという段階でヘルマンがストップをかけてしまうのである。これは非常に残念なことであった。JURYというものは元来自由な発言の場であり、お互いに異なる主義主張をぶつけ合ってこそ、各人の文化的背景の違いや思想の違いが理解できて楽しいものになるはずであるが、Berlageではこの辺は割と一義的でヘルマンの思想の枠組みからずれているものは得てして正当に評価されない場合が多い。故にJURYが終わると不満の残る学生がかなりいることも事実である。

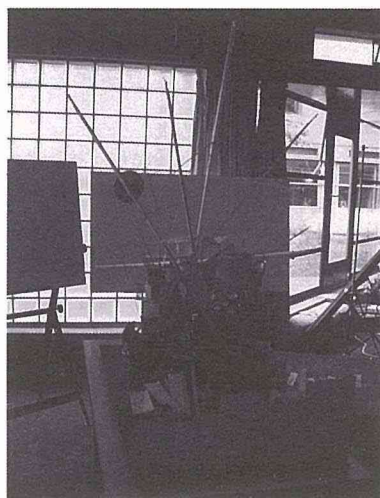
●オランダの建築の流れが基本的には低賃金労働者のための集合住宅の設計に端を発していることから、現実的なプログラムになかで、どれだけその建築を使う人にとって良い建築ができるか、社会的に意味のある建築をつくれるかというの



▲ベルラーヘ・インスティテュート 手前柱右隣がヘルマン・ヘルツベルガー氏  
▶ベルラーヘ・インスティテュートのスタジオもと孤児院(アルド・V・アイク、1960年)

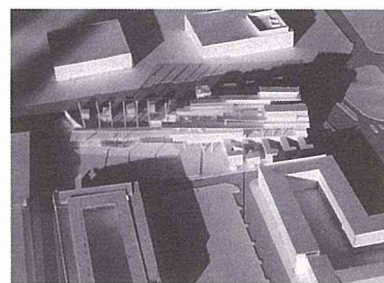
が、社会民主主義の伝統を受け継いでいるオランダの建築界の根底に流れる一種の思想のようなもので、建築家のTask(使命)はまさしくそこにしかないと感じている建築家が多い。

●そういうやや封建的な臭いのするオランダの建築界にもようやくクーン・ファン・ヴェルセンやヨー・クレーネンといったアヴァンギャルドな若手の建築家があるようになってきて、これまで胡座をかいてきた年寄りたちを苛立たせている。日本ではおなじみのレム・クール



ハースなども一応オランダ人建築家であるが、アヴァンギャルド的の作風をみればおわかりのように、彼のような存在はオランダでは特異であって、ヘルマン等とは決して合い入れない。つまりBerlageに教えに来る可能性も少ない。建築家としての彼らの態度は良きにつけ悪きにつけ毅然としている。自分が正しいと思ったことは貫き通し、そのためには他との衝突も辞さない一歩も立場を譲らない。

●ヨーロッパの建築家たち(ベルラーヘに教えにきた講師たち)は自分の立場、



▲学生課題「集合住宅」アムステルダム  
▲学生課題「オープンスペース」アムステルダム

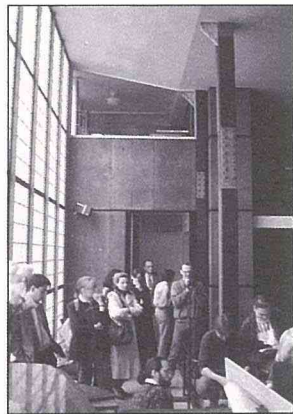
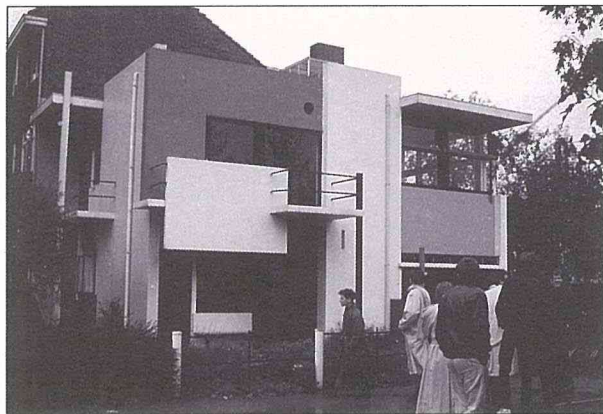
主義主張を守るために相手と牙をむいて徹底して議論する。それがたとえ学生であろうと建築家であろうと容赦はしない。時には非常に子供っぽく見えることもあるが、私は結構このような裸の対立とよんでもよいような、言葉による葛藤が好きであった。日本では建築家同志が結構なあなあでやっているところがあるから、このような目の前の光景は特に新鮮であった。余計なことは言う必要はないが重要なことを言わずにおくのは愚かな行為だと思う。(これは余計なことか?)

●留学する前に、建築は図面上の表現や模型を見せれば言葉が伝わらなくとも相手に自分のやりたいことを理解してもら

えるだろうと、たかをくくっていた私だったが、これは大間違いであった。いくら「もの」が目の前にあってもきちんと自分の作品を説明できなければ彼らは理解を示そうとしない。逆に言えば、いかにスケッチやプレゼンが乏しくとも(勿論それなりのものは必要であるが)作品のコンセプトが明快に説明できれば人びとはそれなりの関心と対応をするのである。本当に人とコミュニケーションをとるのは難しいことだとつくづく思い知らされた1年であった。結局いかにその人のもつパーソナルなイメージが素晴らしいものであっても、それが相手に伝わらなければ何にもならないのである。もし今か

ら留学や将来外国に行くなどと考えている人がいたらその辺のところをよく考えておくべきだと思う。

●ヘルマンとの度重なる対立、アムステルダムでの7度の引っ越し、パリへのEXCURSION、そして5年ぶりの運河の凍結、運河の上でのスケートなどいろいろ盛りだくさんの1年であったが、やはり自分にとって最大の収穫は、それまで写真や図面でしか見られなかったヨーロッパの建築や人びとの生活に直接触れることができたことであろう。「百聞は一見に如ず」世界中のどこへでもいい、留学をすすめます。世界はまだまだ広いはず



◀シュレーダー邸(G.T.リートフェルト, 1924年)  
 ◀ガラスの家(ピエール・シャロー, 1931年)  
 ▼ファン・ネレ煙草工場(J.A.ブリックマン+L.C.ファン・デル・フルフト, 1930年)



私は熊本大学でこの原稿を書いています。東京工業大学には昭和52年の入学から今年の3月までお世話になりました。当世東工大生事情といっても、自分が入学して以来いた学校のことで、なにしろ、自分自身が学生気分でしたから、客観的に学生をみることは、これまでできませんでした。今回、やっと東京工業大学を卒業することができ、熊大生ともわずかながらつきあってもいるので、両校の学生を比較してみたいと思います。

東工大生は、まったくなくなっています。熊大生は助手でも「先生」と呼びます。助手もそういわれないと怒ります。ちなみに私は東工大で「イトピョ

ン」と呼ばれていたこともありましたが、研究室においては、熊大生はいわれた仕事を、不平の一言もいわずに黙々とこなします。東工大生は必ずブツブツいいながら、なかなか仕事もしません。だいたい熊大生はなんでも自分の頭で考えて行動します。先生は何もしなくていい。東工大生は指示しないとできません。もちろん、仕事のできは、東工大生の方がいちいち確認しながらする分、確実ではあると思います。

熊大生が設計製図でどんな図面を描くのかはほとんど知りません。熊大に來るに当たって、一度下見に來た日が、たまたま卒業設計の締切の日に当たっていたので、わずかにそのときの状況は知っています。これはほとんど同じです。ただし熊大生は本当に間に合わせようとしていたのに対し、東工大生は少しくらい遅れても何とかかなと思っている点が違っています。

そんな不真面目でセコイ東工大生がもしかするとまともなかもしれないという気もします。東工大生の気質としてここには悪口を並べましたが、ほとんど同じ内容を褒めた言葉で書くこともできます。また、実際に悪い点はすべて自分の反省すべき点でもあります。



コンペに際し、円陣を組んで気合いをいれる熊大生

TIT 建築設計教育研究会会則

会則の一部改正が3月13日の総会で承認されましたので、全文を掲げます。

第1条 名称

本会はTIT 建築設計教育研究会と称する

第2条 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援し、ひいては優れた建築家を世に送り出すことを目的とする。

第3条 事業内容

本会は次の事業を行う。

- ①国内外の建築家・特別講師等の招聘
- ②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存
- ③展示会・講演会等のイベントの開催
- ④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行
- ⑤その他、本会の目的にかなう事業

第4条 会員

本会は本会の目的に賛同する個人または法人の会員によって構成される。会員個人または法人の拠出する会費を基金として本会を運営する。

第5条 会費

本会の会員の会費は1口年間10万円とし、期間は1年間以上6年間までとする。

第6条 役員

本会は次の役員を置く。  
運営委員6名(運営委員長1名、運営副委員長1名及び監査役1名を含む)

第7条 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

第8条 会計

本会の会計年度は10月1日に始まり、翌年9月30日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

第9条 存続期間

本会の存続期間は1990年10月1日より1996年9月30日までとする。

第10条 会則

本会則は1990年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。

●細則

TIT 建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

第1条 役員

本会の役員の構成は下記による。

運営委員6名(学外運営委員3名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。

東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授・建築計画第二講座教授・その他1名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により3名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名、運営副委員長1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

第2条 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)の出席による集会とする。役員による業務報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

1991年度役員リスト

- 運営委員長：中島隆(1951年卒) 鹿島建設(株)専務取締役 設計・エンジニアリング総事業本部長
- 運営副委員長：林昌二(1953年卒)(株)日建設計副社長
- 運営委員・監査役：戸尾任宏(1954年卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役
- 運営委員：茶谷正洋(1956年卒) 東京工業大学教授
- 運営委員：山下和正(1959年卒) 東京工業大学教授
- 運営委員：小野英哲(1966年東北大学卒) 東京工業大学建築学科主任教授

第2回総会の報告

1992年3月13日(金)午後6時30分～8時、鹿島建設K1ビル大会議室において会員(法人代表及び関連)56名、建築学科教官7名の参加を得て開催され、下記の事項を行った。①運営副委員長の設置と選出の承認(林昌二委員を選出)。②平成3年度(1991年10月1日～1992年9月30日)事業計画の報告。③1991年度大岡山建築賞授賞式。議事後、懇親パーティーを行った。また大岡山建築賞授賞作品が展示された。



大岡山建築賞授賞式

計画系人事異動

- 八木幸二助教授(建築設計基礎講座)：1992年1月1日付で大学院建築学専攻担当教官に就任。
- 宮本文人助教授(文教施設総合研究センター)1992年1月1日付で大学院建築学専攻担当教官に就任。
- 藤岡洋保助教授(一般教育等工学)：1992年1月1日付で建築学科建築計画第1講座助教授より異動。
- 仙田満教授(建築設計基礎講座)：1992年5月16日付で名古屋工業大学より異動。
- 藤野雅統助手：1992年3月31日付で建築計画第2講座助手より退職。
- 伊東龍一助手：1992年4月1日付で建築計画第1講座助手より熊本大学大学院担当助手に異動。

1992年卒業制作・作品展

本学の学生・卒業生が出品する卒業制作・作品展が下記のように開催されます。(ただし、新日本建築家協会主催のものはコンクールのため、出品されるか否かは未定です。)

主催	展覧会名	展覧会場	展示期間
日本建築学会	卒業設計展示会(全国125校)	全国巡回	
日本建築学会	原図展(関東地区32校)	建築会館	6月4日～10日
レモン画翠	作品展	お茶の水スクエア・アートプラザ	5月14日～17日
東京ガスポケットパーク	卒業設計制作展	銀座ポケットパーク	7月～10月
新日本建築家協会	東京都学生卒業コンクール	新宿NSビル	6月4日～

サント・トマス大学建築学科教授団の特別講演

アジア最古の名門総合大学フィリピンのサント・トマス大学の建築学科の4人の教授が平成3年11月6日本学を来訪され、本会の支援で下記の講演が行われた。

- 「Community Architecture」  
Yolanda D. Reyes(主任教授)
- 「Tropical Architecture」  
Tobias Bonaobra(教授)

C.S.ウィルソン教授の講演会

目下ロンドンで工事中の新大英図書館の設計について、設計者のコーリン・スインジョン・ウィルソン教授(イギリス、ケンブリッジ大学)のスライド講演会が新日本建築家協会関東甲信越支部、プリティッシュ・カウンシル主催、TIT建築設計教育研究会協賛で、平成4年5月8日、プリティッシュ・カウンシルで開催された。

1991年度会員追加・訂正  
(社名、口数、本会への代表)

計画・設計・インテグラ 1 村井祐二(1980年卒) 類設計室 2 土山惣一郎(1980年卒) 以上2社追加  
間組 森隆雄(1947年卒)→宮崎吉英(1957年卒)に、東京電力 大島郁夫(1959年卒)→廣田昌憲(1975年卒)に、戸田建設 深谷辰彦(1950年卒)→福沢六朗(1955年卒)にそれぞれ訂正

華Ka No.4 1992年5月30日発行  
発行：TIT 建築設計教育研究会  
(事務局：〒151 東京都渋谷区千駄谷2-10-7 山下和正建築研究所内)  
編集：山下和正・前田哲男(東京工業大学工学部建築学科建築計画第2講座) 編集事務局：東京工業大学工学部建築学科山下研究室内・市川玉枝  
(〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1 phone 03-3726-1111 ex.3167)  
編集協力：(株)松井編集室  
翻訳：デビット・スチュワート  
取材協力：建築学科3・4年生有志  
印刷：三共グラフィック㈱

Editor :  
Yamashita Lab.  
Department of Architecture and Building Engineering  
Tokyo Institute of Technology  
2-12-1 O-okayama Meguro-ku,  
Tokyo 〒152  
phone 03-3726-1111 ext. 3167  
Translation : David Stewart